千葉県教育振興財団調査報告第687集

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書20

―茂原市真名宿谷城跡―

平成24年8月

東日本高速道路株式会社

公益財団法人　千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道
埋蔵文化財調査報告書20

—茂原市真名宿谷城跡—

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第687集として，東日本高速道路株式会社の一般国道486号首都圏中央連絡自動車道の建設事業に伴って実施した茂原市真名宿谷城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，中世末の戦国時代の城跡の一部が調査され，城に伴う遺構とともに，陶磁器や石塔類等の遺物も出土し，真名宿谷城やこの地域の変遷を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深める資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成24年８月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　渡　邉　清　秋

凡　　例

1　本書は，東日本高速道路株式会社による一般国道486号首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県茂原市真名字宿谷973番地ほかに所在する真名宿谷城跡（遺跡コード021-015）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，東日本高速道路株式会社の委託を受け，公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は，主任上席文化財主事　雨宮龍太郎が行った。

6　本書で使用した地形図等は，下記のとおりである。

第２図　国土地理院発行地形図「茂原」１/25,000（昭和57年発行）
「海士有木」１/25,000（昭和63年発行）

第３図　茂原市発行　１/2,500茂原都市計画平面図Ｃ－３（平成14年発行）
１/2,500茂原都市計画平面図Ｃ－４（平成14年発行）
１/2,500茂原都市計画平面図Ｄ－３（平成14年発行）
１/2,500茂原都市計画平面図Ｄ－４（平成14年発行）
小高春雄　真名宿谷城概念図（平成24年制作（未発表））

7　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による平成20年２月１日撮影の１：12,500のものを使用した。

8　本書で使用した座標値は，すべて日本測地系に基づく平面直角座標で，図面の方位はすべて座標北である。

9　図面等におけるスクリーントーン及び記号等の用例はそれぞれに明示した。

10　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，茂原市教育委員会，東日本高速道路株式会社の御指導・御協力を得た。

本　文　目　次

序文
凡例
第１章　はじめに……1
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　調査の方法と安全対策……1
第２章　遺跡周辺の歴史的環境……4
第３章　遺跡の立地と層序……6
　第１節　遺跡の立地……6
　第２節　遺跡の地形と自然層序……6
第４章　検出された遺構……11
　第１節　城跡に伴う遺構……11
　第２節　そのほかの遺構……16
第５章　出土遺物……24
　第１節　遺構出土遺物……24
　第２節　トレンチ出土遺物……27
第６章　まとめ……35
報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第１図　調査期間と調査範囲……2
第２図　真名宿谷城跡と周辺の城跡……5
第３図　調査地点の立地環境……7
第４図　自然層序記録地点と地形の高低差……8
第５図　自然層序（低平地）……9
第６図　自然層序（台地・斜面）……10
第７図　遺構分布図……12
第８図　ＳＸ－01平面図……13
第９図　ＳＸ－01断面図・エレベーション図……14
第10図　ＳＸ－02平面図・断面図……15
第11図　ＳＸ－02エレベーション図……16
第12図　ＳＤ－01平面図……17
第13図　ＳＤ－01断面図……18
第14図　ＳＤ－02平面図・エレベーション図……19
第15図　ＳＴ－01
　平面図・断面図・エレベーション図……20
第16図　ＳＴ－02平面図……21
第17図　ＳＴ－02エレベーション図……22
第18図　ＳＫ－01平面図・エレベーション図……22
第19図　ＳＡ－01
　平面図・断面図・エレベーション図……23
第20図　ＳＸ－01遺物実測図……25
第21図　ＳＤ－01遺物実測図……25
第22図　ＳＴ－02遺物実測図……26
第23図　ＳＫ－01遺物実測図……26
第24図　ＳＡ－01遺物実測図……28
第25図　第１次調査地区トレンチ遺物実測図……28
第26図　第２次調査地区トレンチ遺物実測図……29

第27図　第４次調査地区トレンチ遺物実測図（１）……31
第28図　第４次調査地区トレンチ遺物実測図（２）……32
第29図　第６次調査地区トレンチ遺物実測図……33

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　第１次調査地区調査前風景
北から
西から
図版３　第３次調査地区調査前風景
北から
東から
図版４　第４次調査地区調査前風景
北東から
同近景
図版５　第２次調査地区調査前風景（南から）
第５次調査地区調査前風景（南東から）
図版６　トレンチ発掘状況（１）
第１次調査地区北部低地
第１次調査地区北部低台地
第３次調査地区中央台地
図版７　トレンチ発掘状況（２）
第３次調査地区西部斜面
第４次調査地区西部斜面
第４次調査地区西部台地
図版８　トレンチ発掘状況（３）
第６次調査地区北部斜面
第６次調査地区中央斜面
同上セクション
図版９　トレンチ発掘状況（４）
第２次調査地区中腹台地
第２次調査地区南部斜面
同上セクション
図版10　トレンチ発掘状況（５）
第５次調査地区東部台地
第５次調査地区東部斜面
第５次調査地区南部低地
図版11　ＳＸ－01（１）
調査前風景（北から）
調査前風景（南から）
図版12　ＳＸ－01（２）
腰曲輪（南から）
〃　（北から）
柱穴群
図版13　ＳＸ－01（３）
切岸の状況
同上（北部）
同上（南部）
図版14　ＳＸ－02
調査前
柱穴群
土層セクション
図版15　ＳＤ－01
調査前
西から
東から
溝内ピット
土層セクション
図版16　ＳＤ－02
調査前
北から
屈曲部
図版17　ＳＴ－01
全景
近景

内部から入り口を望む

図版18　ＳＴ－02・ＳＫ－01

ＳＴ－02（上方から）

同上（下方から）

ＳＫ－01

図版19　ＳＡ－01

南から

北から

図版20　陶磁器等（１）

ＳＤ－01－１，ＳＡ－01－１，ＳＴ－02－１，ＳＴ－02－４，ＳＡ－01－２，ＳＡ－01－３，第１次トレンチ－１，第２次トレンチ－１

図版21　陶磁器等（２）

第２次トレンチ－１（内側），第２次トレンチ－２，第１次トレンチ－２，第２次トレンチ－３，第２次トレンチ－４，第２次トレンチ－４(内側),第４次トレンチ－１，第４次トレンチ－３

図版22　陶磁器等（３）

第４次トレンチ－２，第４次トレンチ－４

第４次トレンチ－５，第４次トレンチ－８(内面)，第４次トレンチ－６，第４次トレンチ－７，第４次トレンチ－９，第４次トレンチ－10

図版23　陶磁器等（４）

第４次トレンチ－11,第６次トレンチ－１，第６次トレンチ－２

図版24　石造品（１）

第６次トレンチ－４，ＳＸ－01－３，第６次トレンチ－３

図版25　石造品（２）

第６次トレンチ－５，ＳＴ－02－５，ＳＫ－01－１，第１次トレンチ－５，ＳＡ－01－５

図版26　金属器

第１次トレンチ－３,第１次トレンチ－４，第４次トレンチ－14,第６次トレンチ－６，ＳＤ－01－２，ＳＫ－01－２，ＳＡ－01－６，第４次トレンチ－15，ＳＸ－01－４，第６次トレンチ－７

第1章　は　じ　め　に

第１節　調査の経緯（第１図）

圏央道（首都圏中央連絡自動車道）は首都圏の道路交通の円滑化，環境改善等を企図して，首都圏の広域的な幹線道路網を形成する第三の環状道路として計画立案された。本県におけるこの事業の実施に当たって，事業者である東日本高速道路株式会社は千葉県教育委員会に，事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会を行った。その結果，茂原IC－東金IC間の事業予定地内に真名宿谷城跡の一部が含まれていることが判明し，その取り扱いについて協議を重ねたが，事業計画の変更が困難なため，やむなく記録保存の措置を講ずることとなり，公益財団法人千葉県教育振興財団と東日本高速道路株式会社との委託契約を締結し，発掘調査を実施することとなった。

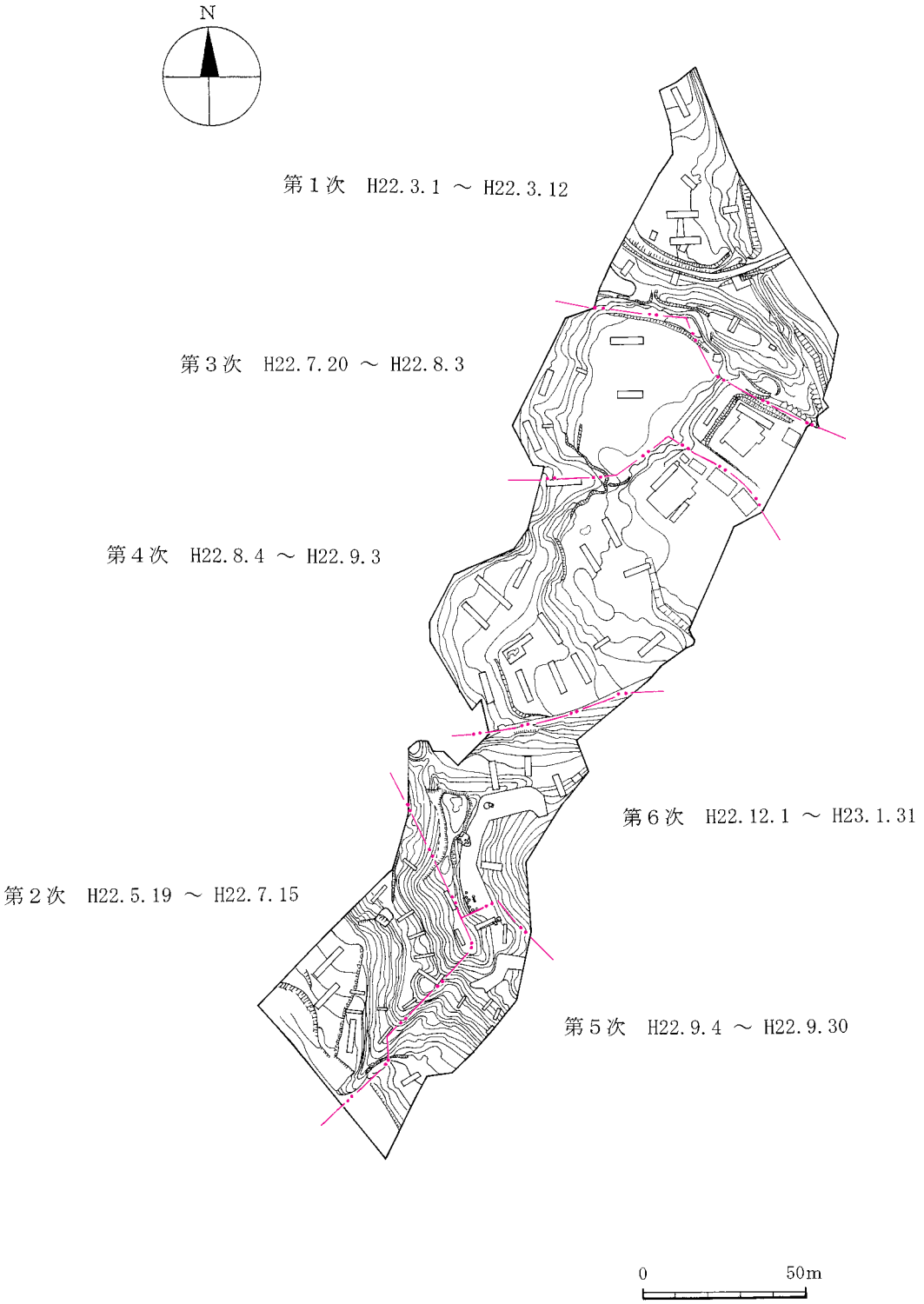
発掘調査は平成21～22年度に６次にわたって，整理作業は平成24年度に実施された。担当した組織，担当者と期間は以下のとおりである。

発掘調査
期　間　　平成22年３月１日～平成23年１月31日
調査研究部長　及川淳一
中央調査事務所長　白井久美子
第１次調査　　平成22年３月１日～平成22年３月12日
担　当　　上席研究員　宇山文治
第２次調査　　平成22年５月19日～平成22年７月15日
担　当　　副所長　高橋博文
第３次調査　　平成22年７月20日～平成22年８月３日
担　当　　副所長　高橋博文
第４次調査　　平成22年８月４日～平成22年９月３日
担　当　　副所長　高橋博文
第５次調査　　平成22年９月４日～平成22年９月30日
担　当　　副所長　高橋博文
第６次調査　　平成22年12月１日～平成23年１月31日
担　当　　上席研究員　鵜沢正則

整理作業
期　間　　平成24年４月２日～平成22年６月29日
調査研究部長　関口達彦
整理課長　高田博
担　当　　主任上席文化財主事　雨宮龍太郎

第２節　調査の方法と安全対策

調査に先立って，公共座標に則り40m平方単位の基準点測量を行った。１単位は100個の４ｍ×４ｍの小単位に均等分割した。併せて調査範囲全体の地形測量も実施した。



第１図　調査期間と調査範囲

調査方法は，幅２ｍのトレンチを設定して，基本的に表土除去は重機を使用し，清掃と遺構検出作業は調査補助員の手作業によった。

調査対象地は丘陵上の斜面が大半を占めるために，ローム層が存在しないので，旧石器時代の調査は実施していない。

調査範囲は急勾配や急傾斜面等が含まれ，一部で重機が進入できないか所があった。そのため，トレンチの設定には制約を受けた。

地形上の危険か所には，仮設の手すりや階段を設置して転倒や転落の危険を防止した。また，傾斜面上に排土を積む際には，土留め柵工事を行って土砂の流出を予防した。

第２章　遺跡周辺の歴史的環境（第２図）

真名宿谷城跡は，外房太平洋に注ぐ一宮川に北西から合流する豊田川の上流右岸に位置している。周辺は標高50～60mの丘陵化した舌状台地が羊歯葉状に発達し，現在では多くのゴルフ場が立地している。明治期に西洋から考古学が導入されて以来，当地を含む長生郡域は，夥しい横穴墓群が所在することで夙に著名である。本報告の主題は城跡なので，ここでは城跡・砦跡に限って周辺遺跡を紹介していこう。

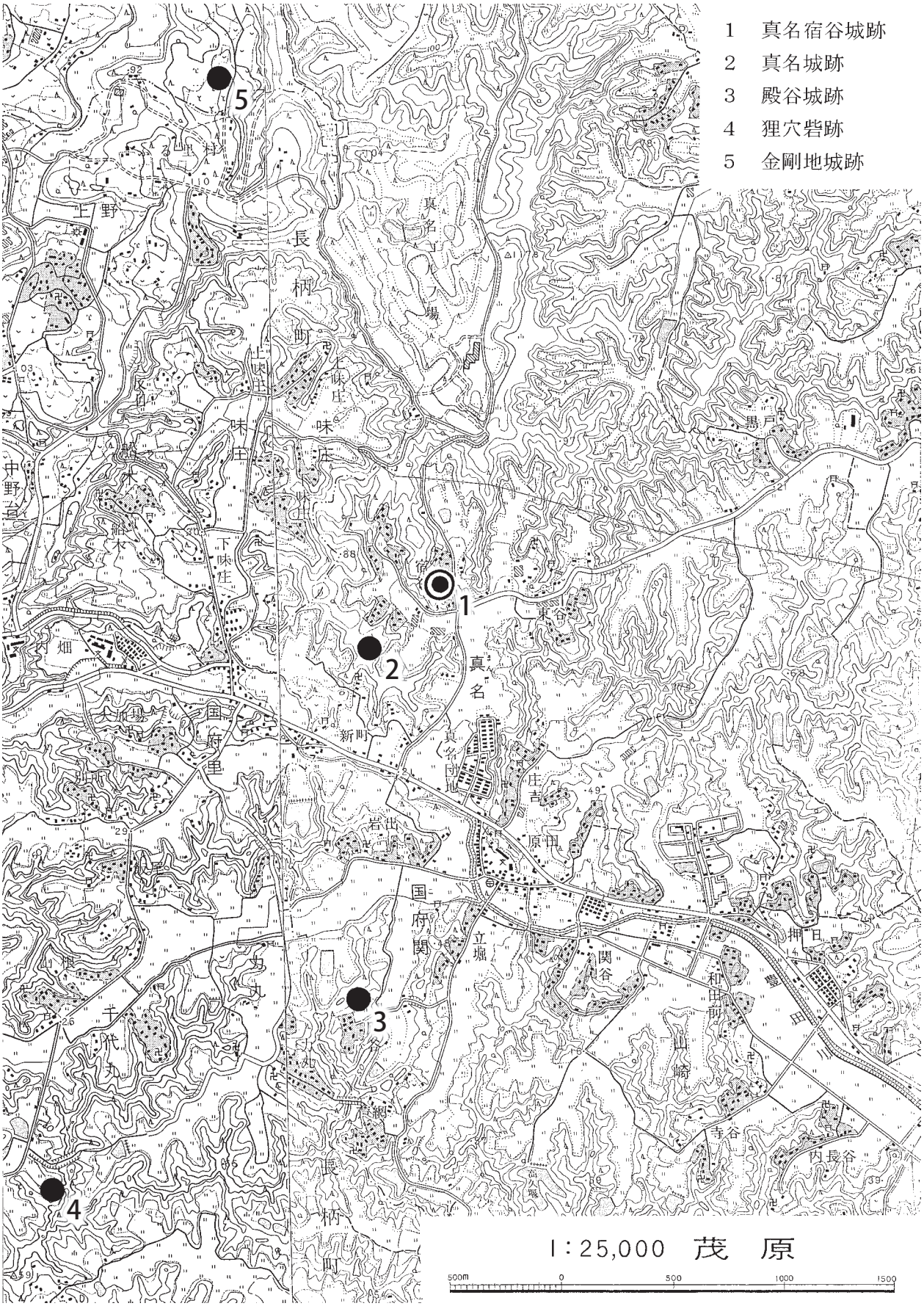
茂原市真名城跡（２）は谷津を挟んで本遺跡の西南に対峙している。長さ600mの長大な城で，曲輪間の区画は不明瞭でまとまりを欠き，腰曲輪や堀切の造作を多用している[1)]。茂原市殿谷城跡（３）は腰曲輪と堀切を主体とする小規模な城砦遺構である[2)]。長柄町狸穴砦跡（４）は100m×70mの規模で，曲輪・空堀・土塁等から構成される。市原市金剛地城跡（５）は950m×700mと大規模で，曲輪・空堀・土塁・虎口等が造作されている[3)]。これらの城・砦跡はいずれも15～16世紀の戦国時代の所産と考えられる。

注

１）千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ―旧上総・安房国地域―』

２）小高春雄　1991『長生の城』

３）(財)千葉県文化財センター　1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（３）―千葉市・市原市・長生地区（改訂版）―』



第２図　真名宿谷城と周辺の城跡

第３章　遺跡の立地と層序

第１節　遺跡の立地（第３図）

中世城跡は，複雑な自然地形を巧みに利用して造営されているものが多い。それゆえ本報告では，必ずしも遺構が検出されない地点についても，トレンチ調査の成果から当地の自然地形を具体的に説明することにつとめた。

真名宿谷城は自然地形を生かした曲輪群から構成されている。南北約300m，東西約150mの南北に細長い小規模な城である。西側には腰曲輪が発達し，随所に尾根を断ち切る堀切が所在する。城の西南に残る「堀之内」という地名は城主の居館跡，また，東南の「宿谷」は城に付属する宿跡と考えられる[1)]。

今回の調査範囲と概念図を比較すれば，調査範囲南部の尾根筋が腰曲輪や山上曲輪として造成・整備されている可能性がもたれる。調査範囲は尾根と平場が交錯しており，尾根の部分には各種曲輪類や堀切が，また，平場の部分には宿関係の遺構が埋没している可能性がある。

第２節　遺跡の地形と自然層序（第４図～第６図）

調査範囲は丘陵地の一角を含み，総面積は16,822.74㎡である。最高所は標高60.331mを測り，低地との比高差が約33mある。

調査地点は，通常発掘調査が行われる低台地とは異なり，尾根と平場が交錯して，高低差がかなり激しい。その地形を北から説明すれば，水田面の延長の平場から，すぐ東西にのびる低い尾根があり，調査地点中央付近は二段に分かれる平場が形成されている。その南には北東にのびる支尾根と，さらに東南にのびるその本尾根がある。調査範囲の最高所は，この本尾根上にある。この尾根の南は水田面へ続く平場となっている。

次に，調査地内の自然層序を，低平地（Ａ・Ｂ・Ｃ）・台地（Ｄ・Ｅ）・斜面（Ｆ・Ｇ）に分けて，その代表的な状態を説明しよう。

低平地の地山層はＡ・Ｂにみるように，水気が多く，低地特有の酸欠気味な暗緑褐色土層である。Ｃは実質は尾根の山麓部分で，その地山層は，丘陵岩盤の軟質砂岩から形成された黄灰褐色砂層，または粘土層となっている。Ａの中間層もこの土が崩落したものである。

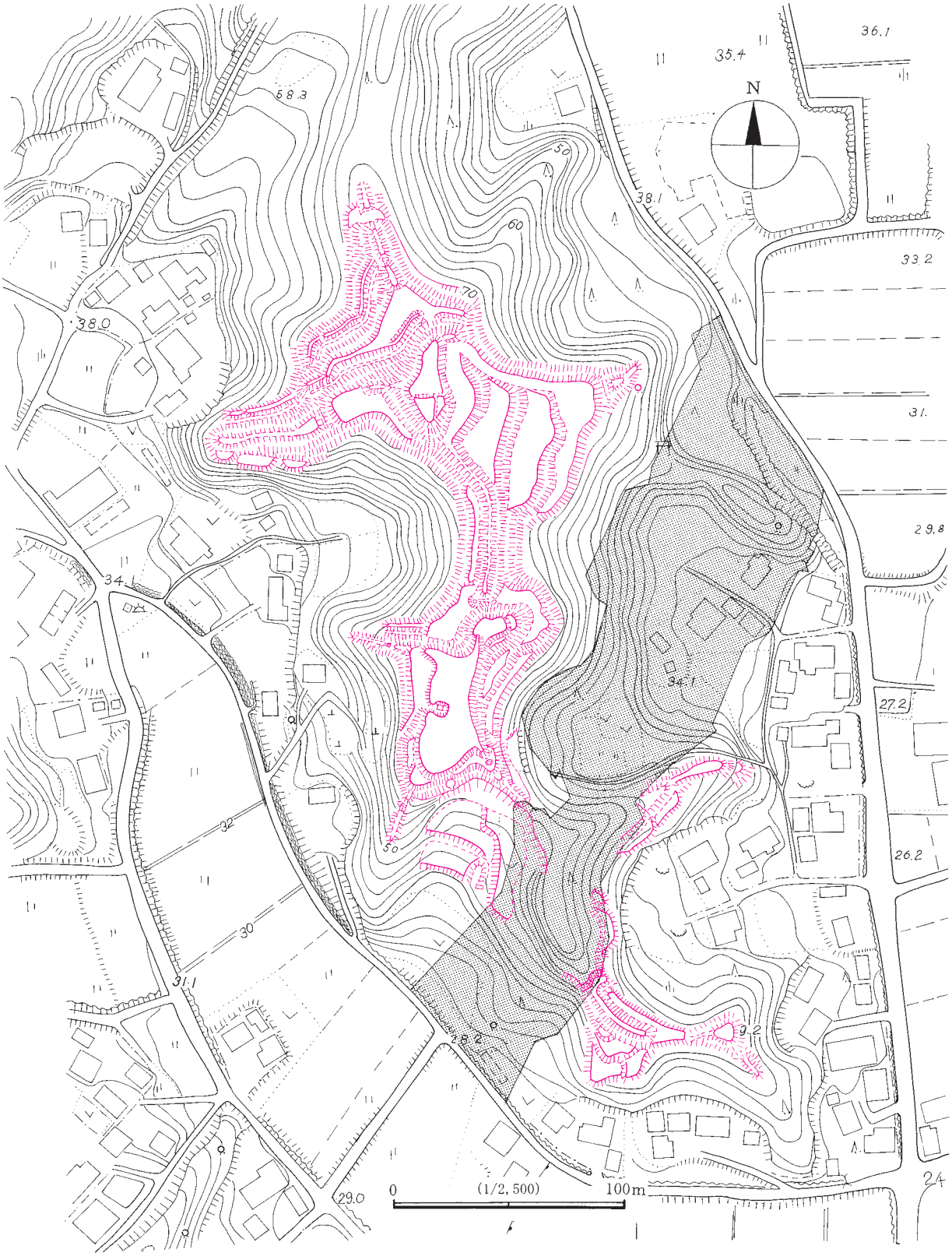
台地では，標高差によって地山層が異なっている。Ｅでは低平地系の粘性ある青灰色土層であるのに対し，若干標高の高いＤでは砂粒が含まれる丘陵系の黄灰色土層となっている。

斜面の地山層は，丘陵岩盤の黄灰色軟質砂岩そのもの，またはそれから形成される同色系の砂層や粘土層である。Ｆは比較的緩斜面，Ｇは急斜面の層序である。斜面では自然堆積よりも，高所からの土砂の崩落・流出によって層序が形成されている。

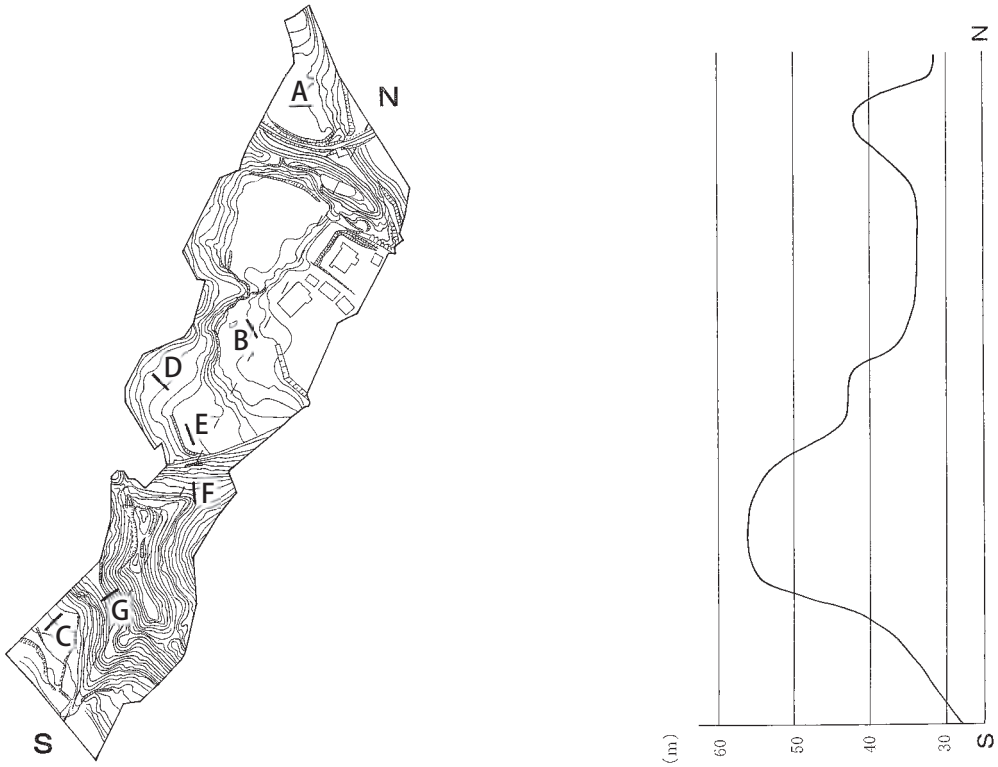
以上の各地形の層序から明らかなように，ここでは関東ローム層はほとんど未発達といってよいだろう。

注

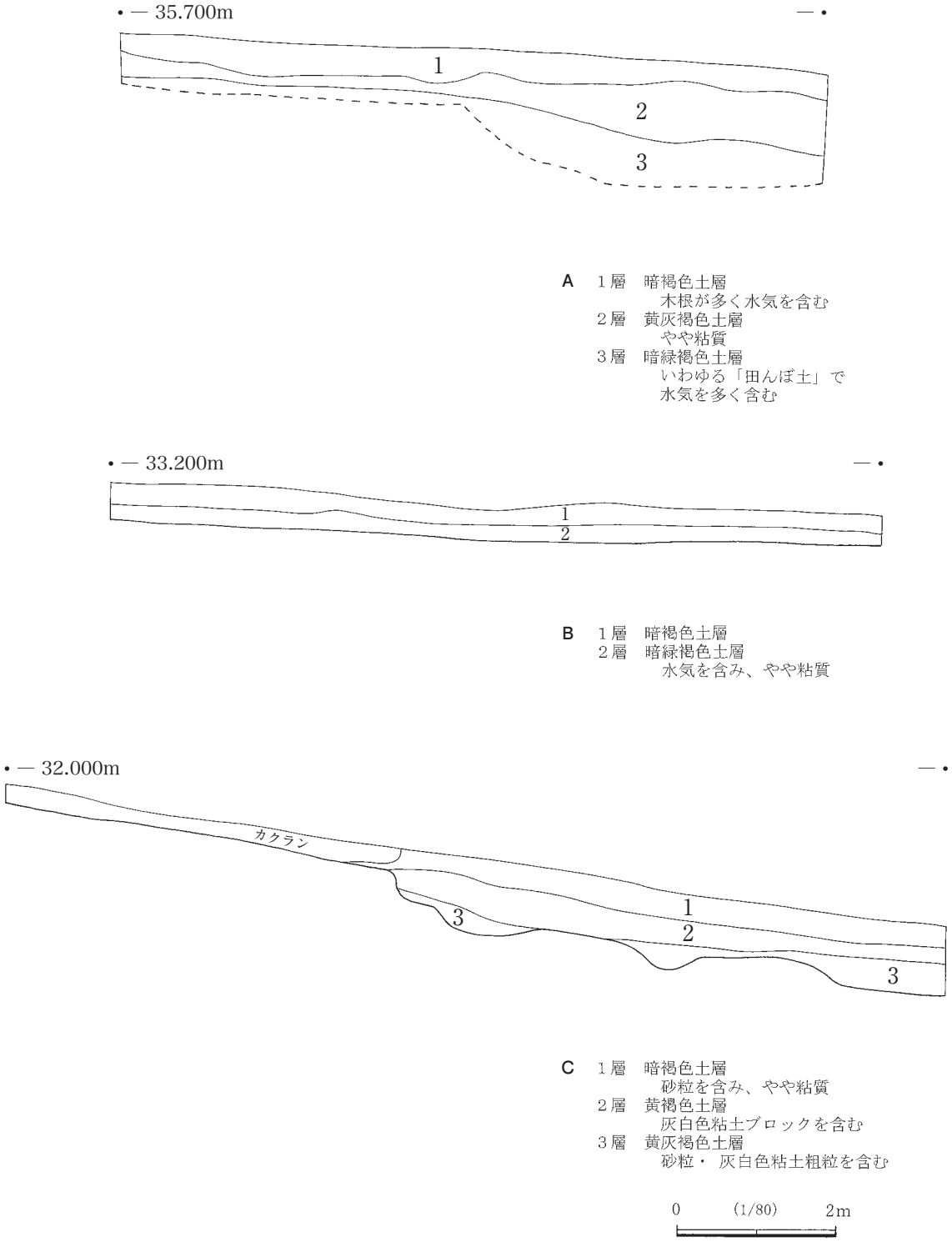
１）小高春雄　1991『長生の城』



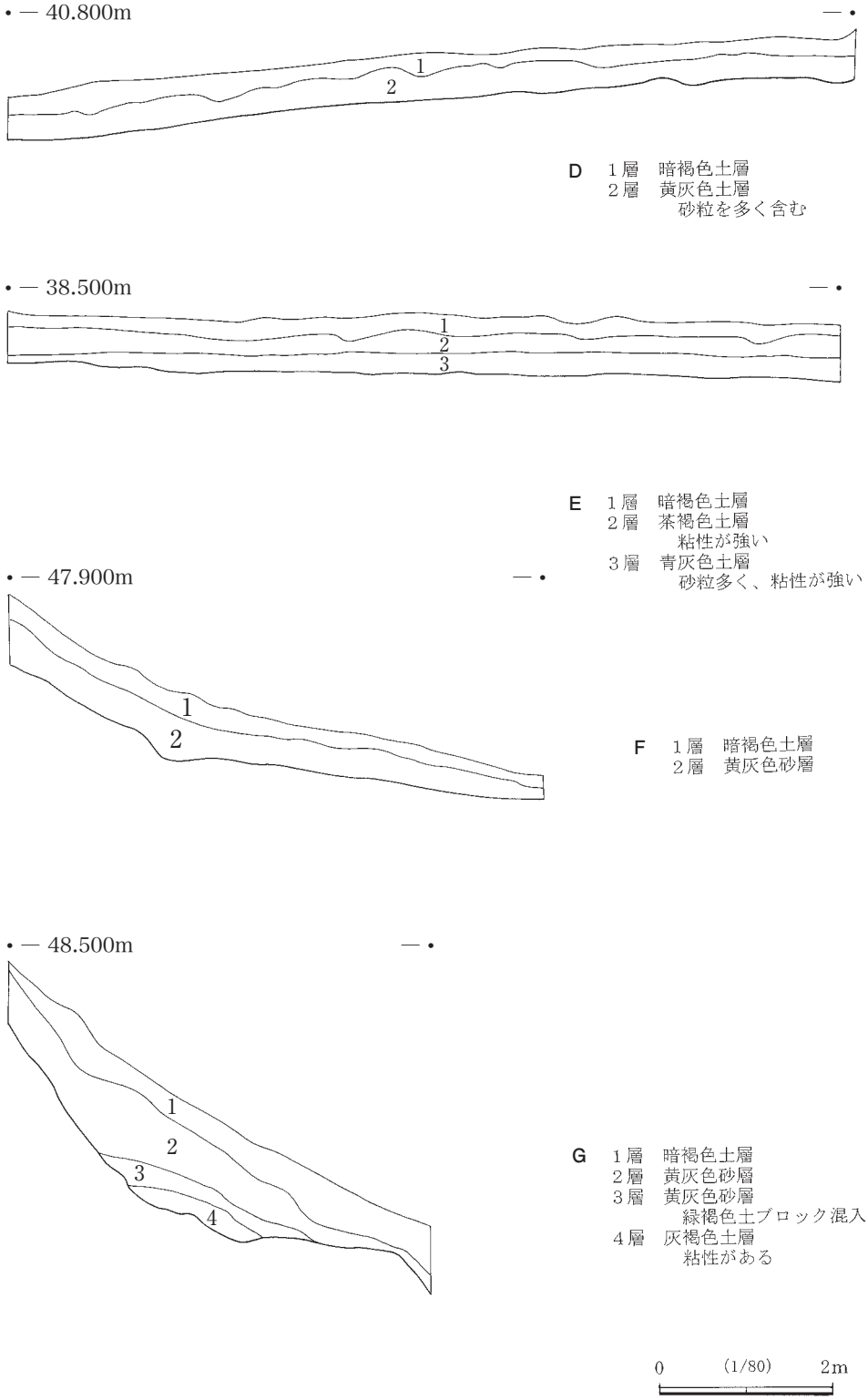
第３図　調査地点の立地環境



第４図　自然層序記録地点と地形の高低差


35.700m
1
2
3
A　1層　暗褐色土層
木根が多く水気を含む
2層　黄灰褐色土層
やや粘質
3層　暗緑褐色土層
いわゆる「田んぼ土」で
水気を多く含む
33.200m
1
2
B　1層　暗褐色土層
2層　暗緑褐色土層
水気を含み、やや粘質
32.000m
カクラン
1
2
3
3
C　1層　暗褐色土層
砂粒を含み、やや粘質
2層　黄褐色土層
灰白色粘土ブロックを含む
3層　黄灰褐色土層
砂粒・ 灰白色粘土粗粒を含む
0　(1/80)　2m

第５図　自然層序（低平地）



第６図　自然層序（台地・斜面）

第４章　検出された遺構

検出された遺構には，真名宿谷城跡に伴う遺構と，城跡とは無関係な遺構がある。後者はさらに，城跡よりも古い遺構と，城跡よりも新しい遺構に分けることができる。

第１節　城跡に伴う遺構（第７図）

城跡に伴う遺構は，曲輪の一部となる造成・填圧された平場と，尾根を断ち切っている堀切である。

ＳＸ－01（第８・９図）

調査区南部から検出された腰曲輪の先端部である。調査区内最高所の尾根筋の，東側急斜面に造成されている。遺構を検出した範囲で，長さ49.4m，幅は最も広い部分で11.4m，最も狭い部分で4.0mである。

北端でＳＤ－01と接続し，幅が最も狭い屈曲部分でＳＴ－01と切りあっている。また，検出範囲の南端からは，多数の柱穴群が確認された。

土層断面を観察すると，山側の土を削り取り，その土を谷側に埋め敷いて平坦面の面積を増やしている。平坦面を造成後に全体的に填圧を加えているが，谷側の埋め土量が不十分なために，谷側に緩く傾斜している。

南端の柱穴群からは掘立柱建物の存在が想定される。

ＳＸ－02（第10・11図）

調査区北西部で検出された，城跡本体から延びてきた尾根上の曲輪の東端部である。尾根周縁が切岸整形されている。この尾根はなおも東に延びているが，鞍部の切通しは近年のもので，東端の尾根には人的な造成の痕跡は認められない。

尾根上の第９トレンチからは，しまりのある旧表土が確認され，多数の柱穴状ピットが検出された。

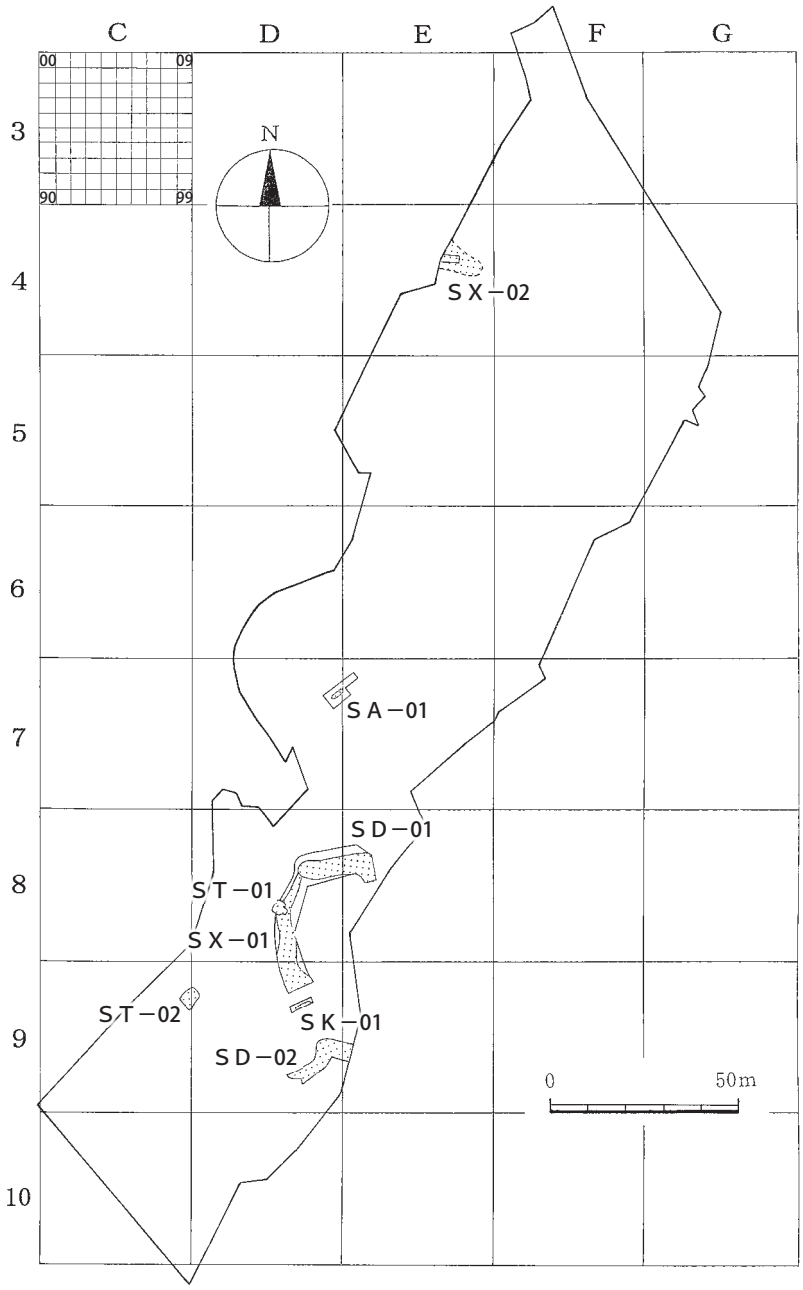
ＳＤ－01（第12・13図）

ＳＸ－01と西端で接続する堀切である。東北東に延びる尾根の南側斜面を掘り下げて，ＳＸ－01と尾根との間の通行を妨げている。

ほぼ直角に屈折する逆Ｌ字状を呈し，南東端では検出範囲外に，さらに人為的掘削が続いている。この堀は検出された範囲で，東西方向35.5m，南北方向14.4mを測る。底面は平坦で，３か所に段差が認められる。東ほど幅が広くなり，1.7m～3.9mになる。深さは尾根側から測れば9.5m～10.7m，谷側から測れば2.9m～3.3mある。

堀内には大小２か所の土坑が存在する。小は堀の西端に近く，方形で１辺2.1m，堀の底面からの深さ2.2mを測る。大は堀の屈折部にあり，4.3m～4.8m×7.9mの長方形を呈し，深さは堀の底面から3.2m程である。

断面観察によれば，この堀は人為的に一気に埋められたのではなく，徐々に自然に埋没していったと思



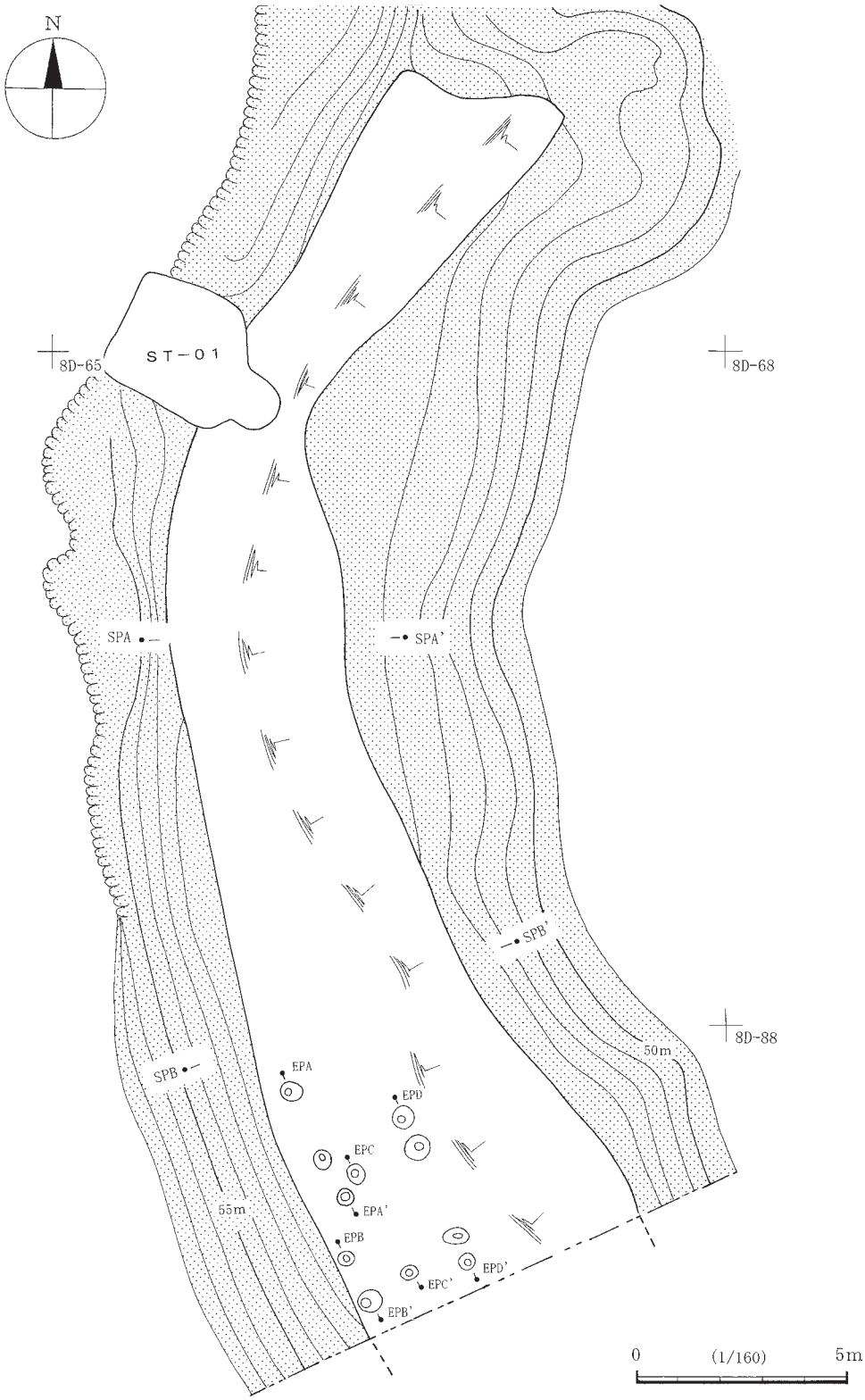
第７図　遺構分布図

われる。

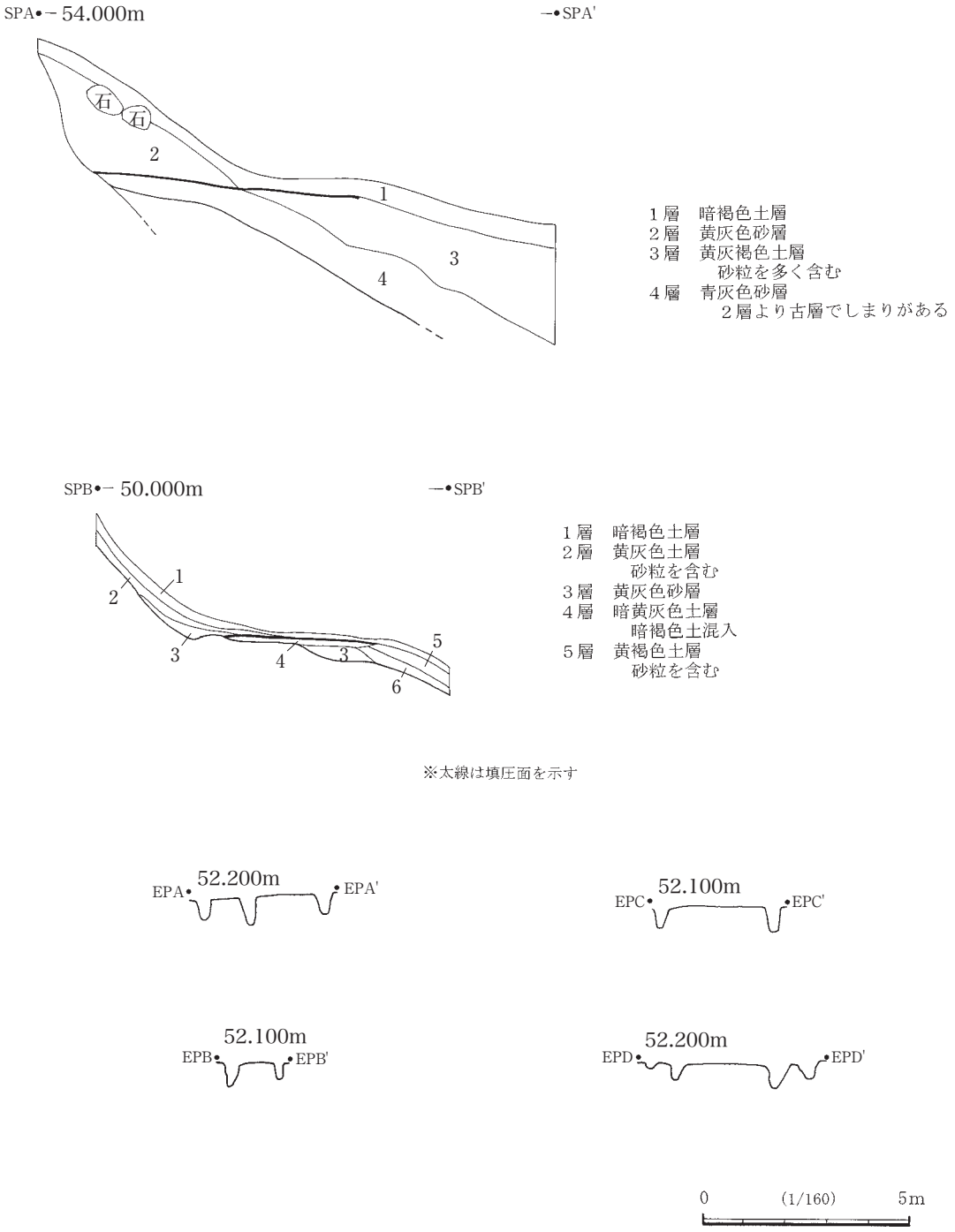
ＳＤ－02（第14図）

調査区内の最南端の遺構である。重機を主体にして遺構面を検出した。東南に延びる尾根の南側を巻いている堀である。地形に沿って緩く蛇行しており，検出範囲西端で途切れている。長さは21.5mである。標高の低い東側では幅狭く，鋭角的に掘られているが，標高の高い西側では幅広く掘り込まれている。底面は平坦で，幅は0.8m～0.9mを測る。明瞭な段差が２か所存在する。

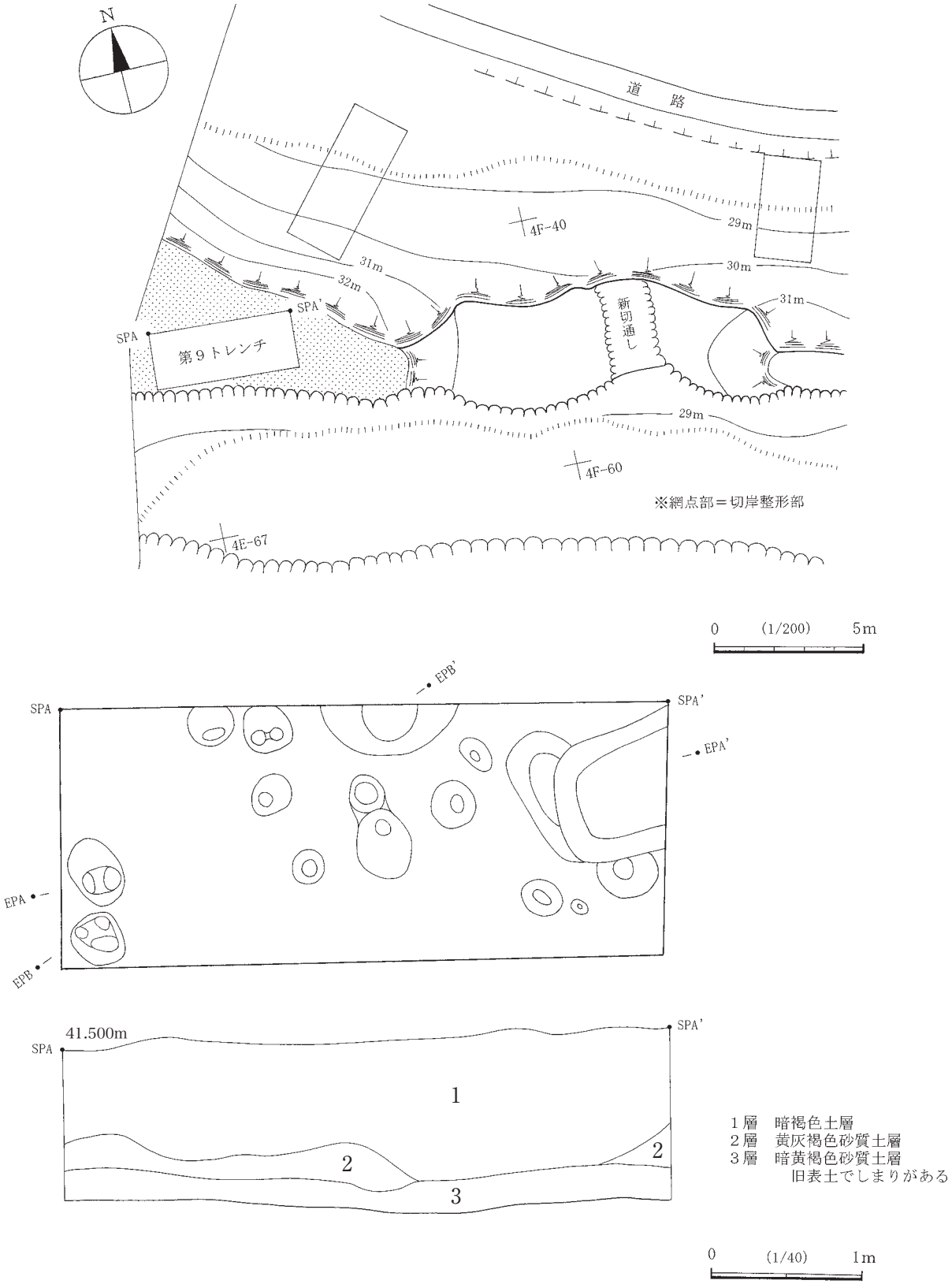
なお，この堀が取り巻く尾根について，頂部平坦地と南側斜面にトレンチを入れたが，人為的な造作を示す痕跡は見いだせなかった。


N
ST－01
8D-65
8D-68
8D-88
SPA
SPA'
SPB
SPB'
EPA
EPD
EPC
EPA'
EPB
EPC'
EPD'
EPB'
55m
50m
0
(1/160)
5m

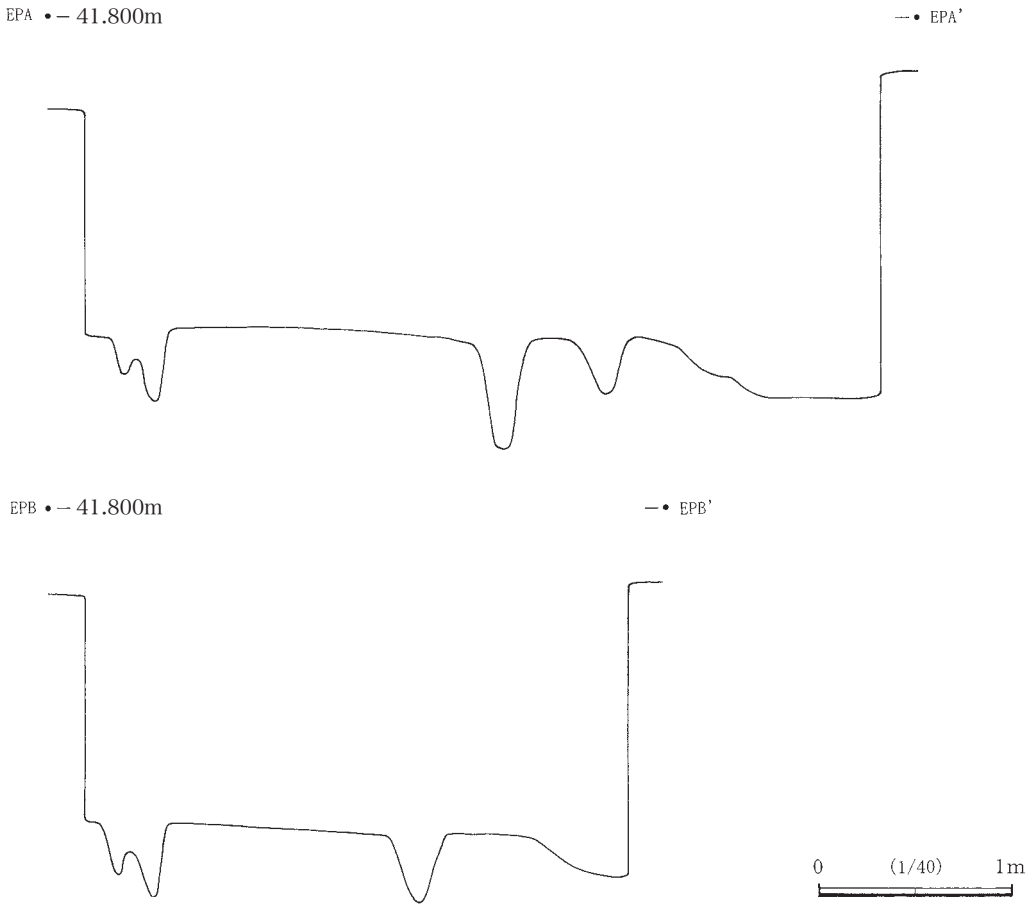
第８図　ＳＸ－01平面図



第９図　ＳＸ－01断面図・エレベーション図



第10図　ＳＸ－02平面図・断面図



第11図　ＳＸ－02エレベーション図

第２節　そのほかの遺構（第７図）

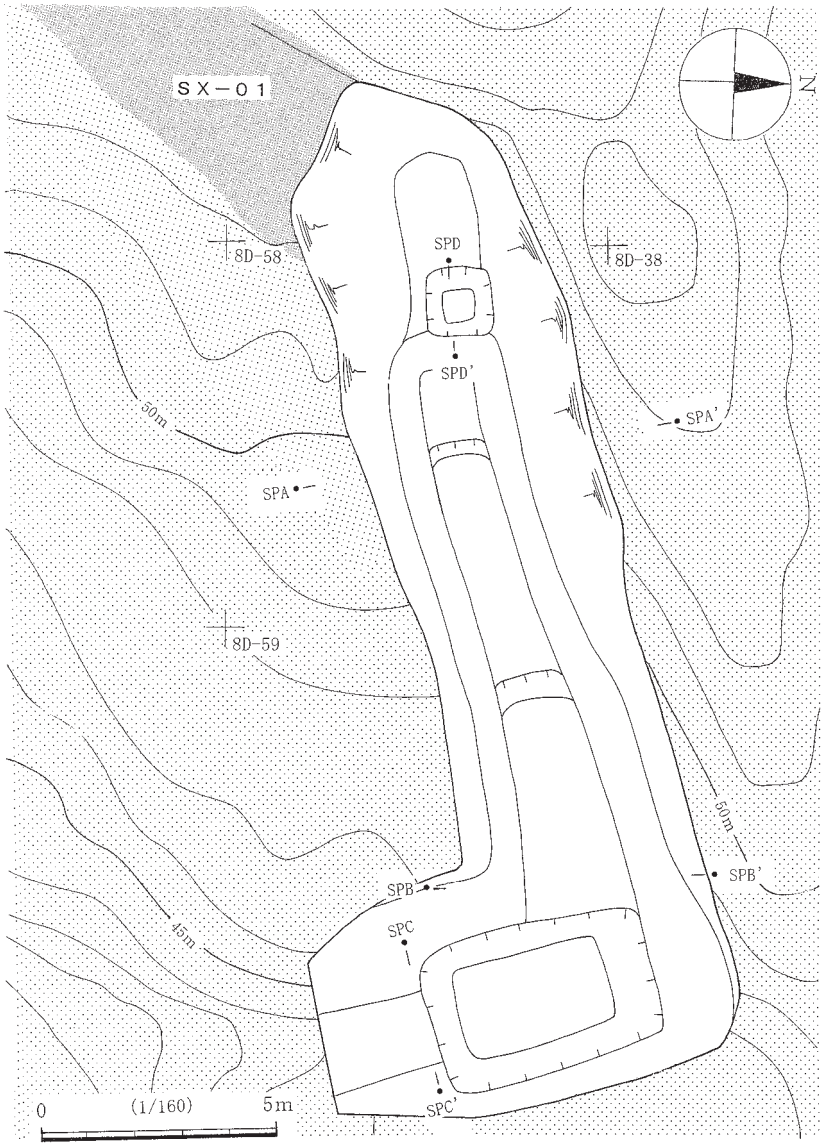
真名宿谷城跡より古い遺構としてＳＴ－01，ＳＴ－02があり，新しい遺構としてはＳＫ－01，ＳＡ－01が検出された。

ＳＴ－01（第15図）

本遺構は中世のやぐらであり，ＳＸ－01と切りあっており，天井部が崩落して，調査前から遺構表土が窪んでいた。玄室の形状は2.5m×2.8mのほぼ方形で，短い羨道を含めた全長は4.4mを測る。高さは残存高で1.8mである。

玄室床面は平坦で，３基のピットが存在する。そのうち２基は奥壁両隅に，１基は玄室入り口に掘られている。

羨道は細く，玄室左寄りにとりついている。高い位置から段差を経て玄室に降りている。



第12図　ＳＤ－01平面図

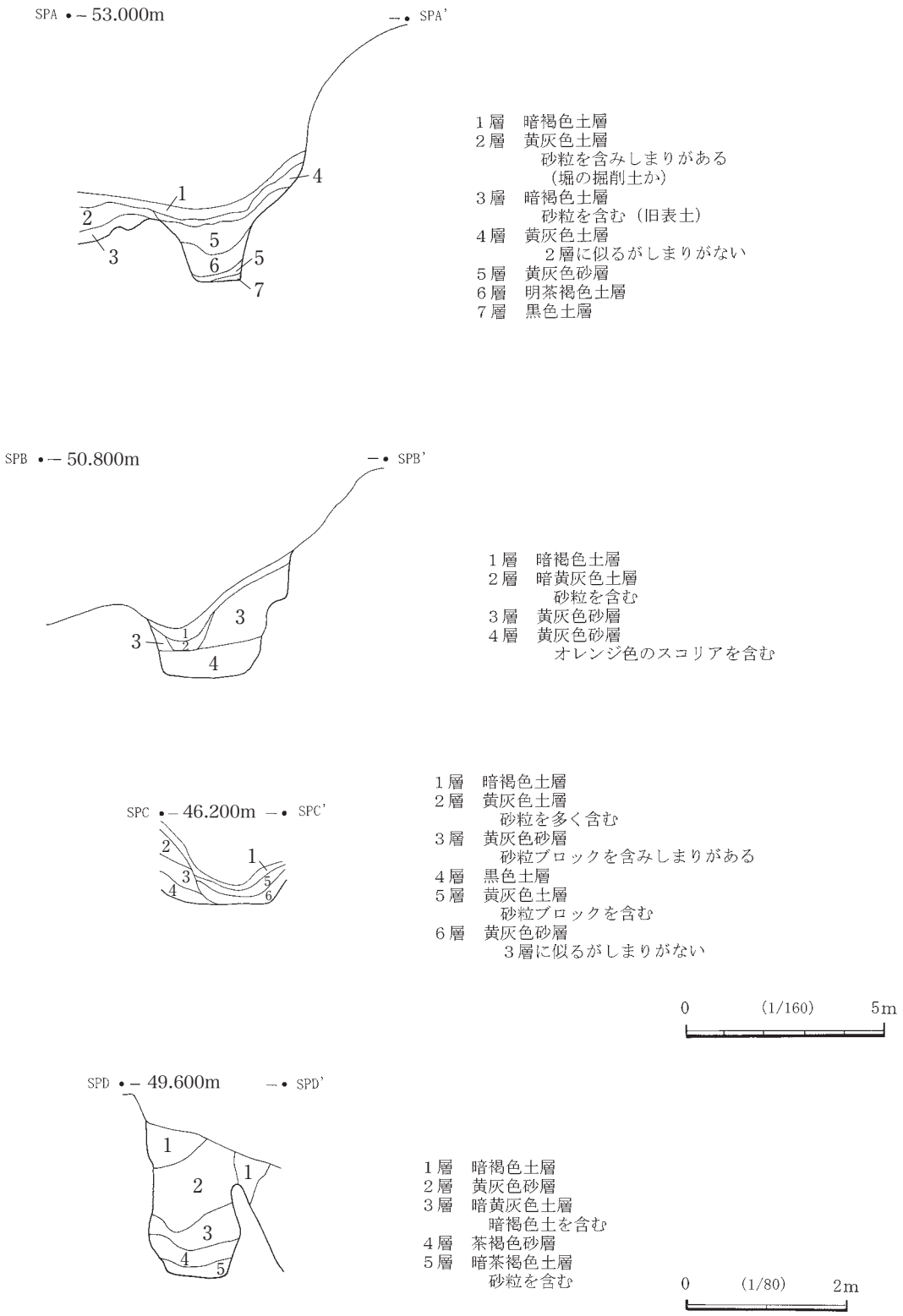
ＳＴ－02（第16・17図）

調査区南西に位置している。本遺構は一見横穴墓に類似するが，玄室が高すぎ，また，長すぎること，羨道と玄室を区切る段差が低く，高壇とは呼び得ないこと等から，やぐらとみなすことができる。天井部はすでに失われていた。

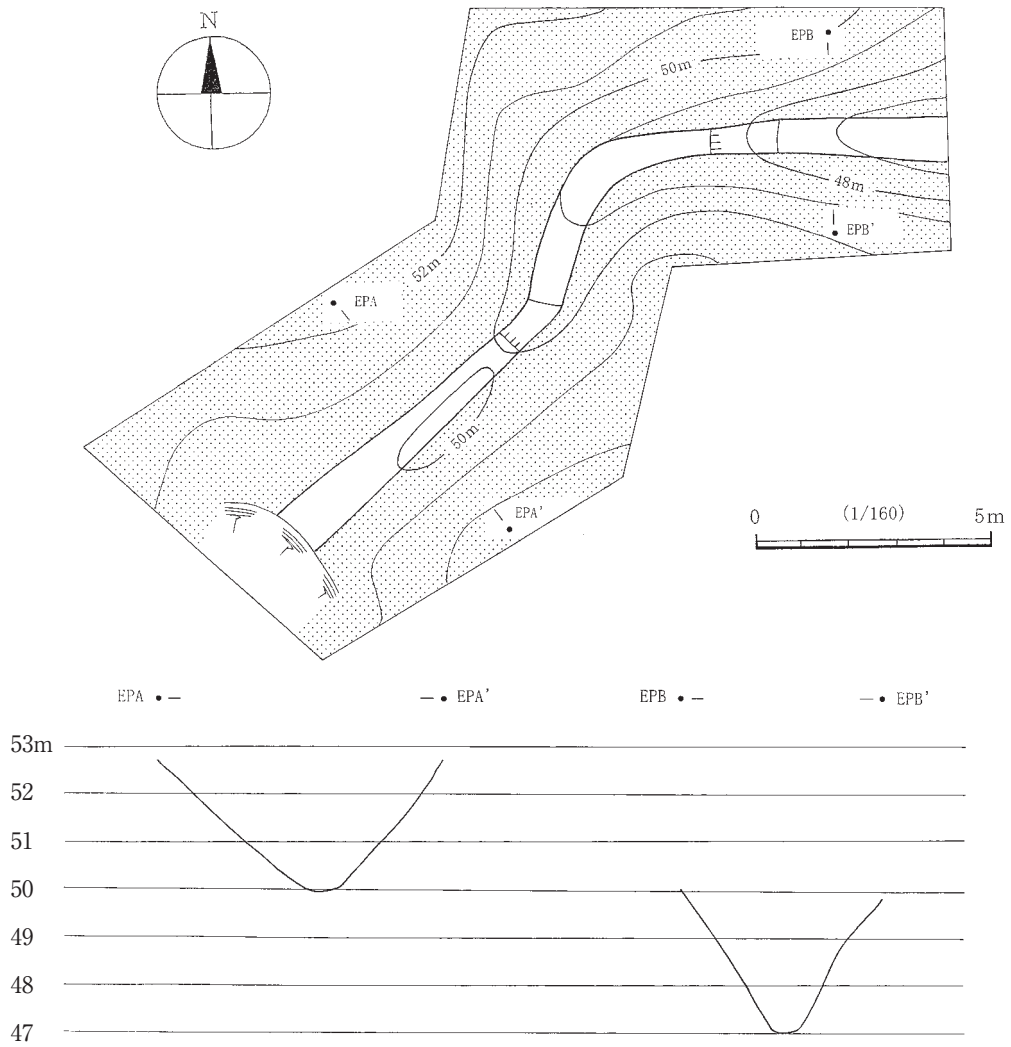
全長は7.35m，残存高は羨道入り口から計測すると6.2mになる。玄室の長さは4.1m，幅は奥壁下で2.6mを測る。羨道は平面台形を呈し，入り口の方が若干広くなっている。長さは2.3m，幅は入り口で2.45mである。

玄室はおおむね平坦だが，入り口に向かって傾斜している。西側羨道付近はややふくらんでいる。段差にかかる場所には，不整形な落ち込みが見られる。玄室と羨道を区切る段差は，66°の角度で高さ1.4mを測る。羨道は平坦で，わずかに入り口に向かって傾斜している。

ＳＫ－01（第18図）



第13図　ＳＤ－01断面図



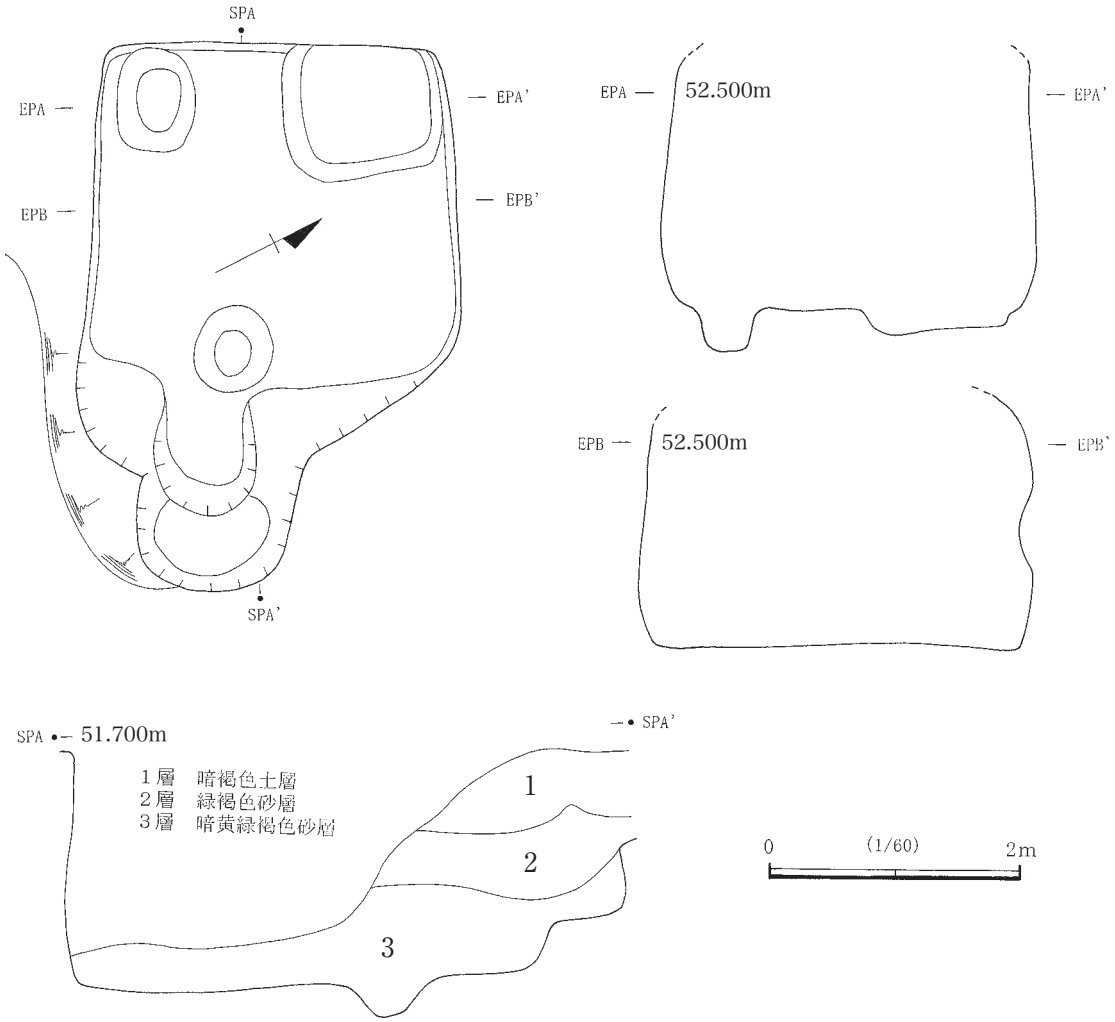
第14図　ＳＤ－02平面図・エレベーション図

調査区南東部にあり，ＳＸ－01とＳＤ－02の中間に位置している。確認範囲では方形状遺構の一部と思われ，１辺の長さは4.6m，深さ0.5mを測る。外縁上に不整円形のピットがある。寛永通宝（江戸時代）が伴ったので，さらなる拡張調査は行わなかった。

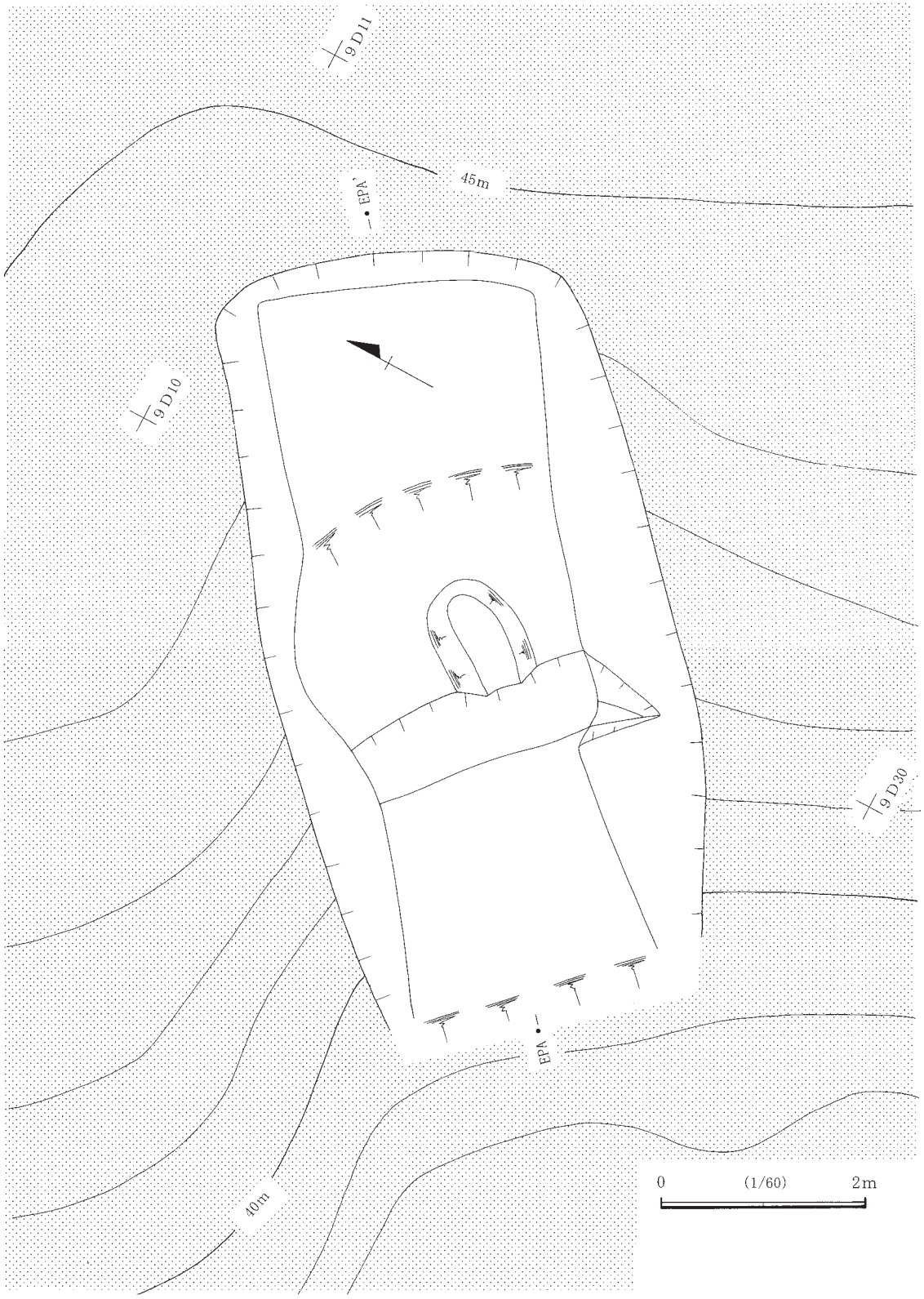
ＳＡ－01（第19図）

調査区中央付近に位置する。杭列と溝を主体とする遺構である。北東―西南方向に５本の杭跡が並び，その南に屈曲する１条の溝が伴っている。溝中にも３本の杭跡が見いだされた。溝の南側にはさらに小さな４本の杭跡が存在する。杭列と溝の周囲は浅く落ち込んでいる。杭跡内には杭材が遺存していた。また，杭列と溝の間からは杉の小枝や樹皮が，散乱した状態で検出された。

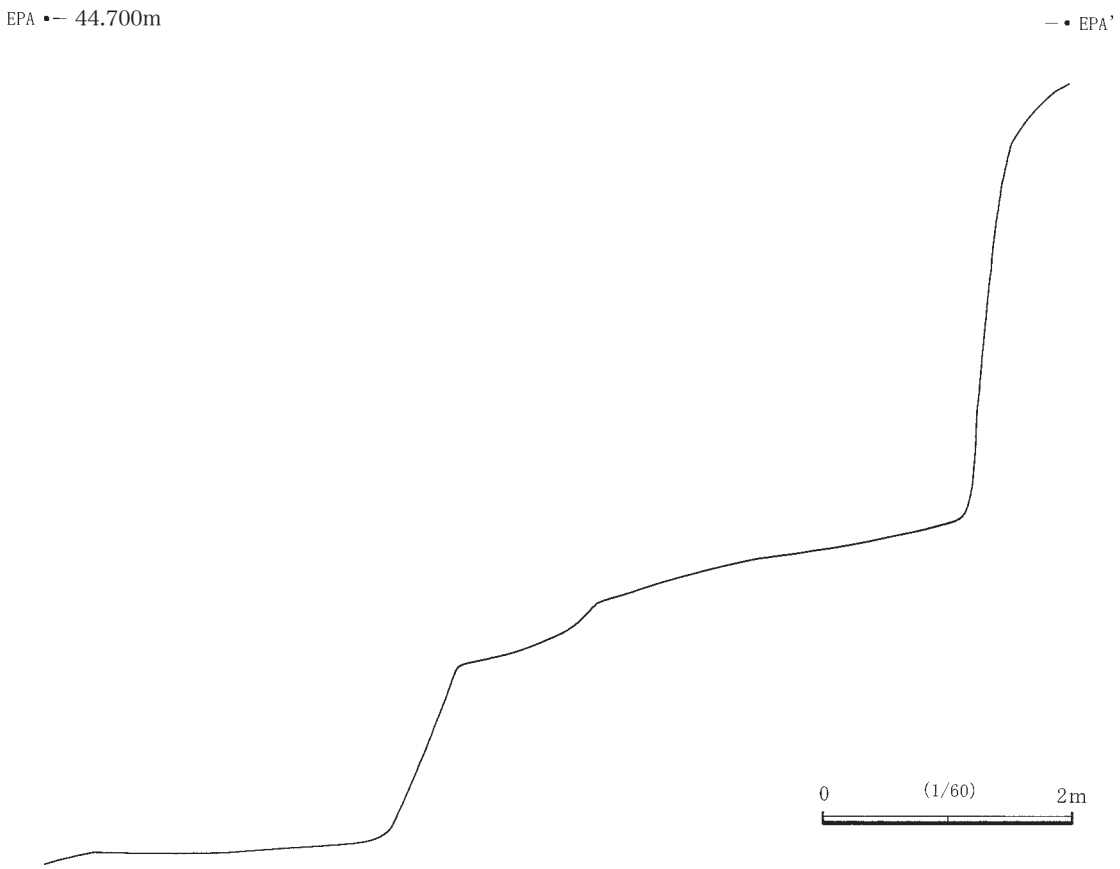
杭の直径は太いもので20～30cm，細いもので６～12cm，太杭跡の深さは50～60cmである。溝の長さは4.7m，溝底の幅は20～30cmである。



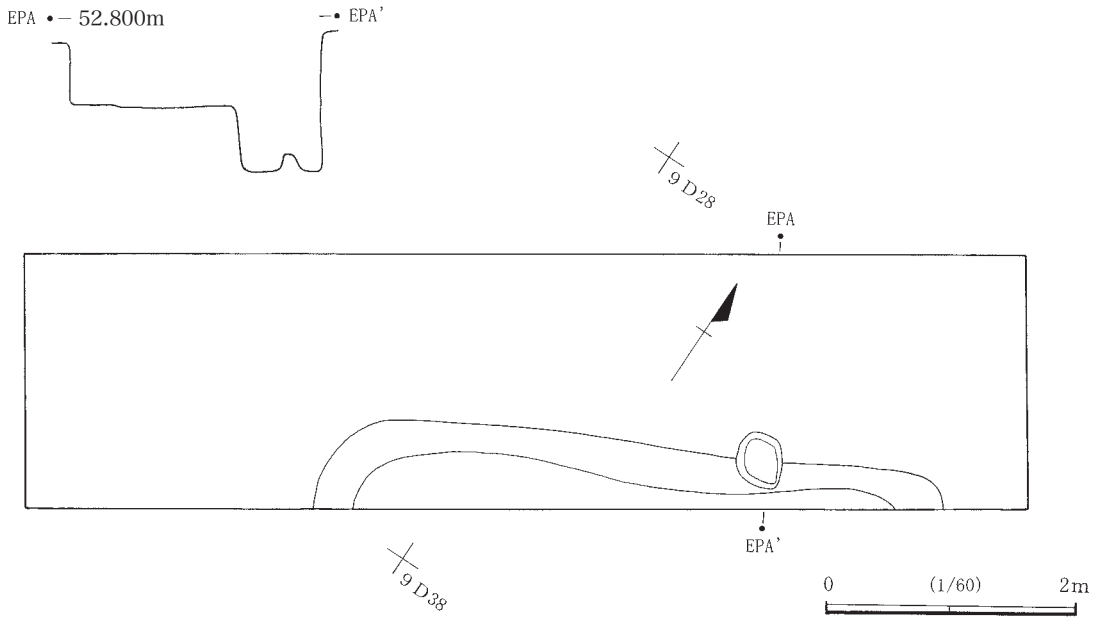
第15図　ＳＴ－01平面図・断面図・エレベーション図



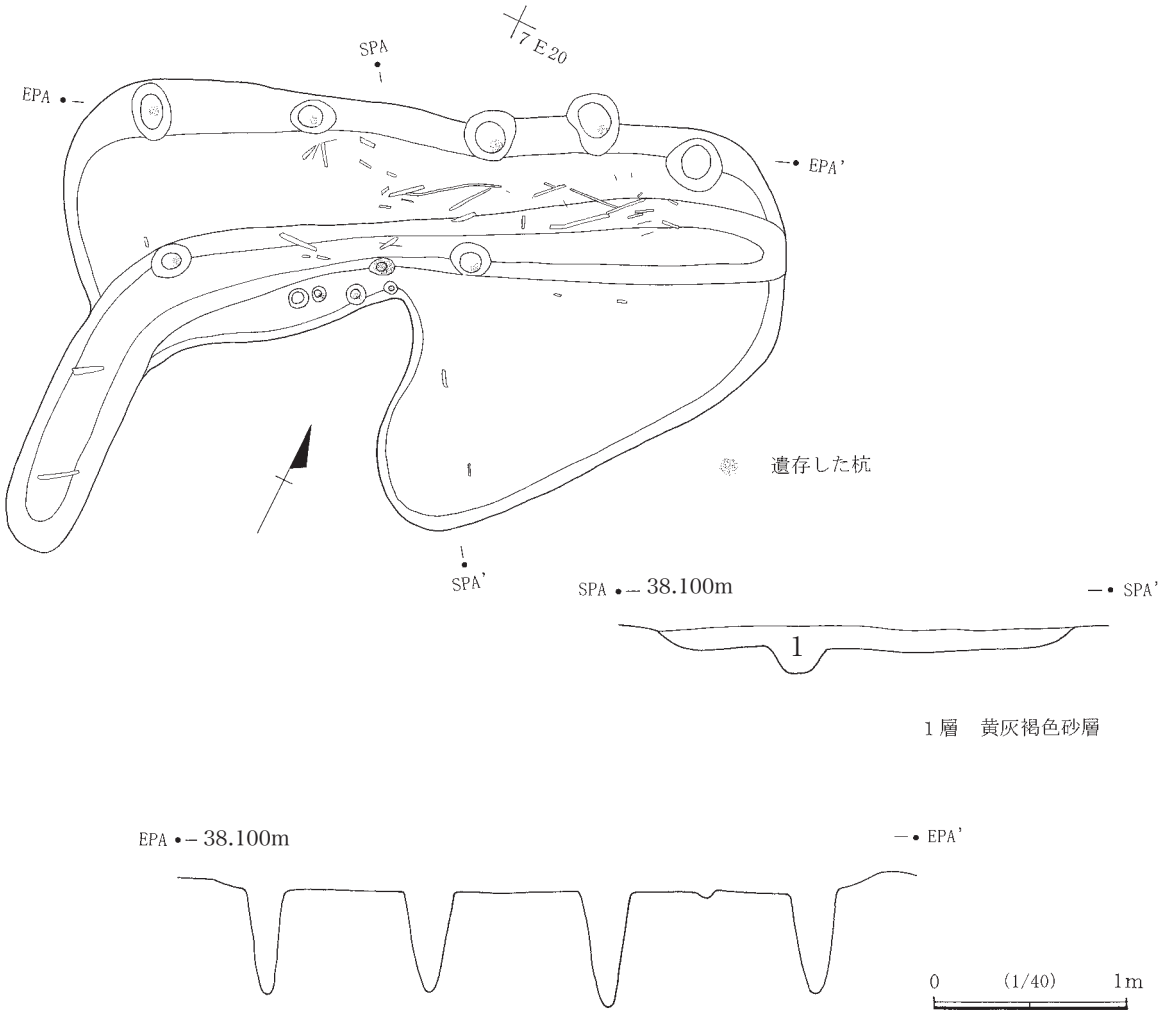
第16図　ＳＴ－02平面図



第17図　ＳＴ－02エレベーション図



第18図　ＳＫ－01平面図・エレベーション図



第19図　ＳＡ－01平面図・断面図・エレベーション図

第５章　出　土　遺　物

遺物は各遺構と第１・２・４・６次調査地区トレンチから出土している。

第１節　遺構出土遺物

ＳＸ－01出土遺物（第20図）

１は在地産のカワラケで，現高1.8cm，復元底径4.5cmを測る。明褐色で，胎土には砂粒が混じる。全面にナデ調整がなされている。

２は須恵器甕の胴上部破片である。外面には明黄褐色の自然釉がかかり，浅い平行タタキ目が観察される。内面は横ナデ調整されている。胎土は暗灰色で，焼成は堅緻である。

３は宝篋印塔の相輪部である。最下部には露盤に差し込む断面円形のほぞが付いている。白色斑晶を多く含んだ玄武岩製である。現高38.0cm，最大径は最下位の伏鉢部で10.4cmで，重量は3.0kgを測る。天頂の宝珠，請花の下には，宝篋印塔特有の隅飾り突起が造作され，以下，九輪部，請花，伏鉢，ほぞから構成されている。隅飾り突起の平面形が正方形であり，九輪部の横断面形が隅丸胴張り正方形であることから，無文の九輪部はその省略表現とみなすよりも，隅飾り突起直下の塔身部と見立てた方がよいだろう。とすれば，この宝篋印塔は多層塔として造られていたことになる。

４・５は古銭貨で，いずれも鐚（びた）銭で，青緑色の錆が付着している。５はかなりもろくなっている。銭銘はつぶれており，判読しがたい。かろうじて４の下字は「元」，５の左字は「寶」と読める。直径はいずれも2.3cmで，４は1.88g，５は1.56gを測る。

ＳＤ－01出土遺物（第21図）

１は肥前磁器の小型碗で，ほぼ完形である。直立する高台から，体部があまり開かず口縁にいたる。胎土は青白く，無文である。全面に透明釉がかかっており，外面では横ナデ痕が顕著である。19世紀の製品である。口径7.4cm，高さ3.9cm，底径3.0を測る。

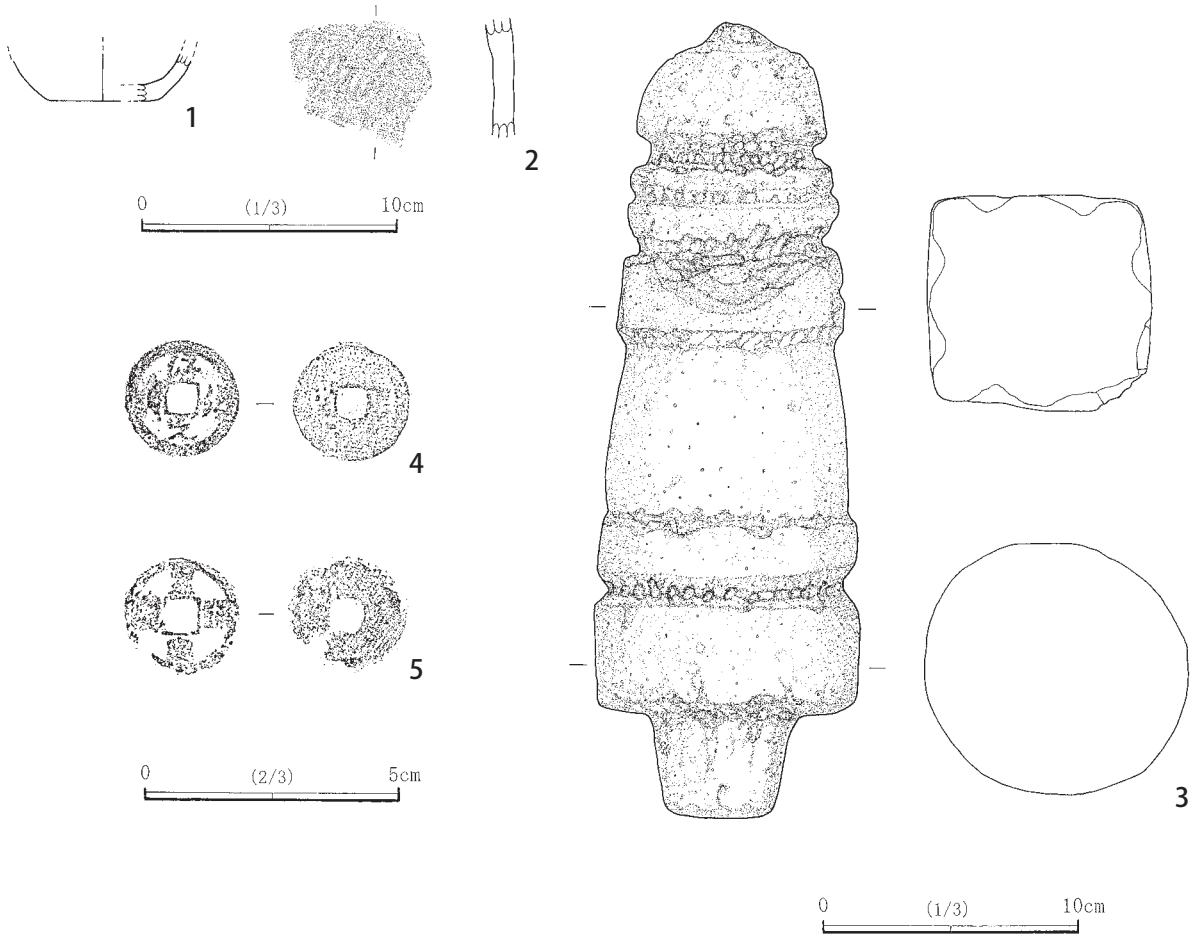
２は不明鉄器である。図示した上端線は原状をとどめている。厚さ２mmときわめて薄い。中央に横走する突帯があり，その上は土器の口縁のように端部が反り返っている。外面は着色されたように赤みがかっている。5.4gを測る。

ＳＴ－02出土遺物（第22図）

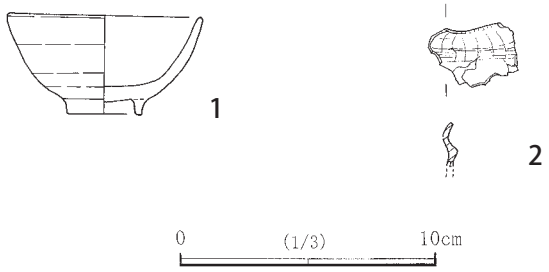
１は瀬戸・美濃製丸碗の口縁破片である。胎土は黄白色で，全面に釉がかかり，細かい貫入が入っている。外面は部分的に黄緑色を呈する。18～19世紀の産であろう。

２は土師器坏の底部破片である。赤褐色で器壁は薄い。底部立ち上がりは深く面取りされている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整される。焼成後に火を受けたらしく，内外面とも細かな貫入状の剥離が見られる。

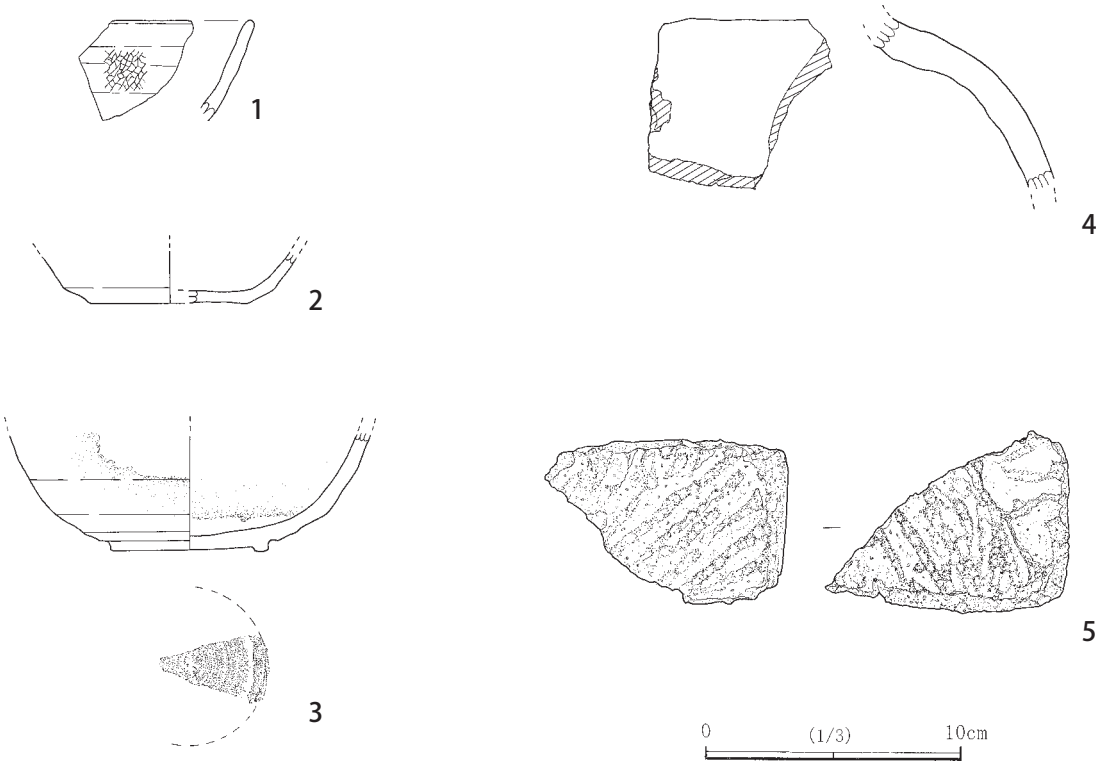
３は瀬戸・美濃産の丸碗の体部から底部にかけた破片である。胎土は黄白色で，底部は削りだし輪高台



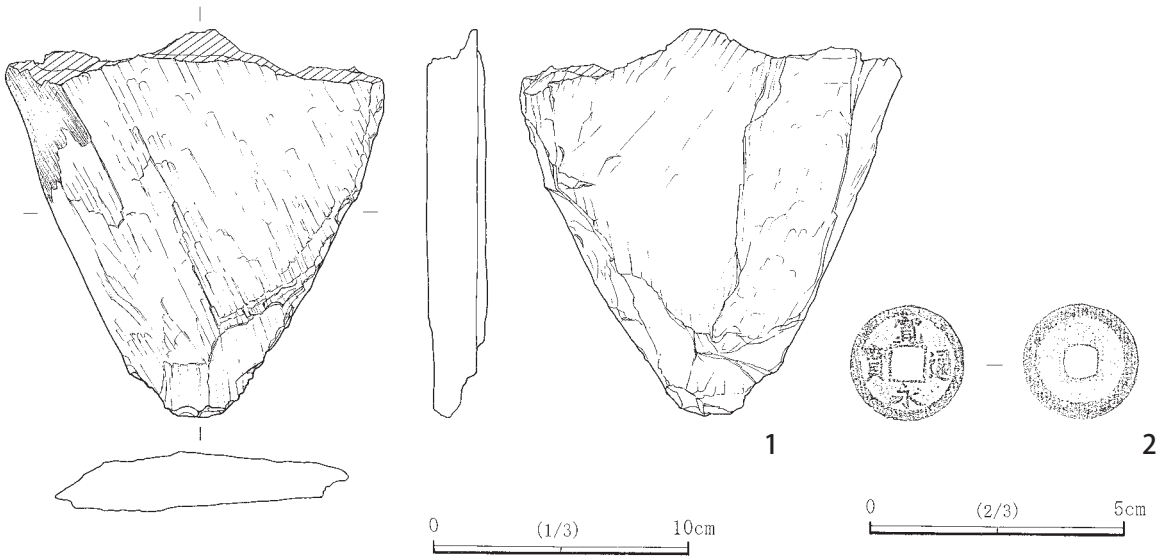
第20図　ＳＸ－01遺物実測図



第21図　ＳＤ－01遺物実測図



第22図　ＳＴ－02遺物実測図



第23図　ＳＫ－01遺物実測図

に加工され，体部があまり開かずに立ち上がる。胎土は乳褐色を呈し，外面はほぼ無釉，内面は灰釉化している。17世紀の前半に属しよう。

４は常滑製の甕または壷の胴上部破片である。内外面とも暗赤褐色を呈する。図示した上端部には，外反する口径部が接続するのであろう。15～16世紀の所産であろう。

５は五輪塔の地輪（基壇），または宝篋印塔の基礎の隅角破片である。原材は玄武岩で，やや赤みがあり，白色斑晶が顕著であり，微細な雲母片が混入している。重量225gを測る。表面には刃先の細いノミまたはタガネで整形加工した痕跡がうかがえる。

ＳＫ－01出土遺物（第23図）

１は板碑下端部破片である。現長15.3cm，最大幅15.0cm，重量609gを測る。いわゆる青石と呼ばれる緑泥片岩で造られている。図示左側（表面）は左側より，図示右側（裏面）は右側より，細かい剥離を加えて整形加工している。

２は銅製の寛永通宝である。直径2.3cm，重量2.53gを測る。

ＳＡ－01出土遺物（第24図）

１は肥前磁器の染付碗で，底部を欠いた半分弱の破片である。胎土は青白く，濃紺色で一筆書き風の草花文を配している。18世紀の製品である。

２は18世紀の肥前磁器の染付碗で，口縁～体部にかけての小破片である。口縁は大きく開いて，大ぶりな器形となる。胎土は青白色で透明釉がかかっている。外面は無文で，内面には底部近くに二重同心円，その上方には花弁文が描かれている。

３は瀬戸・美濃産の擂鉢の口縁部破片である。胎土は淡灰色で，両面に鉄色の釉がかかる。体部外面には強い横ナデ痕が残っている。16世紀前半の所産であろう。

４は須恵器坏の口縁部破片である。胎土は精緻で，器壁は薄い。明灰色を呈し，内外面とも横ナデ調整が施されている。大きく開く器形となろう。

５は燧石である。半透明で，重量4.3gを測る。

６は寛永通宝の鉄銭である。直径2.3cm，重量2.67gを測る。幕末期の所産であろう。

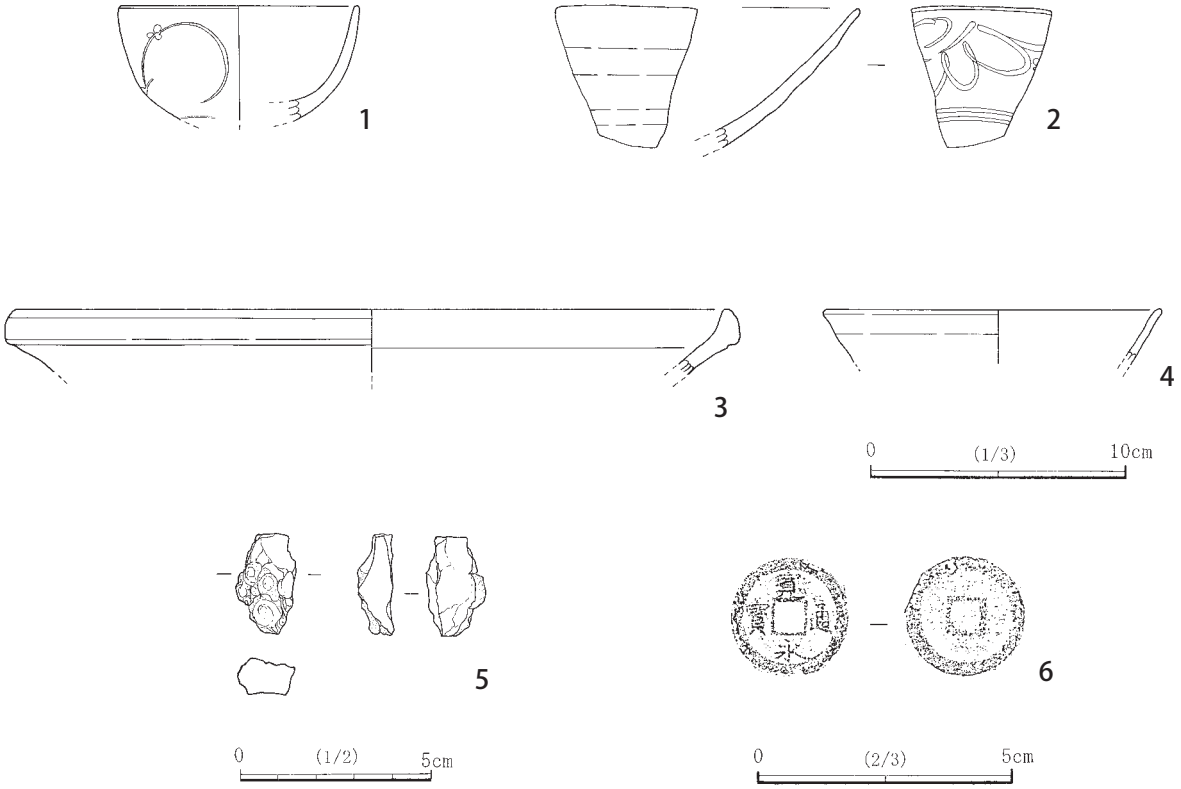
第２節　トレンチ出土遺物

第１次調査地区（第25図）

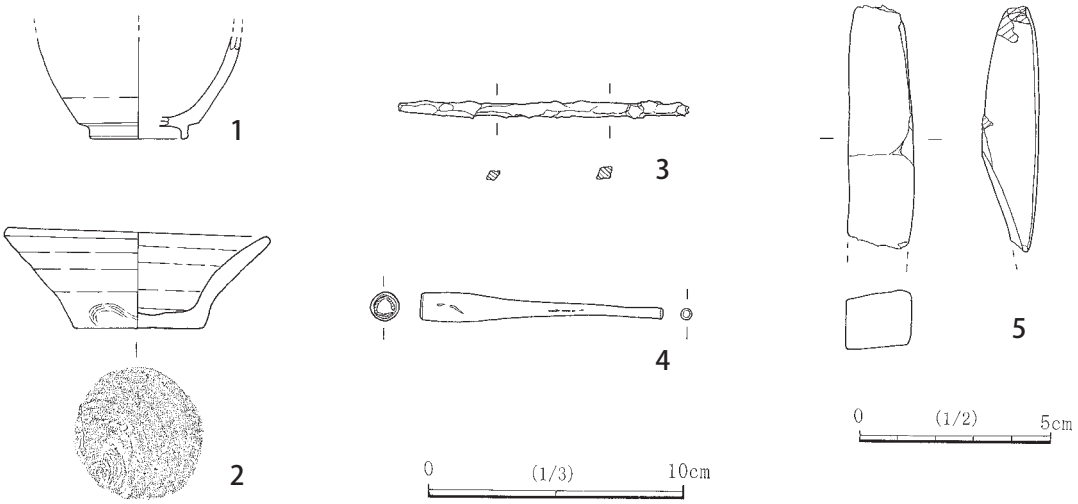
１は瀬戸・美濃産の小型碗破片で，体部～底部1/3程が残存している。器壁は均質で，底部近くがとくに厚くなるということはない。体部は無文で，底部には直立する削りだし高台を付けている。口縁は開かずに筒形の器形になる。釉は両面にかけられ，両面とも微細な貫入が生じている。釉は透明だが，両面とも底部付近は淡桃色を帯びている。18世紀の製品である。

２は在地産のカワラケで，口縁から体部にかけて1/3程欠失している。胎土は精選され，体部下位から大きく開いて口縁にいたる器形で，横ナデ調整痕が顕著で，底部は糸切り未調整である。赤褐色を呈する。口径10.2cm，高さ3.9cm，底径5.2cmを測る。17世紀の所産であろう。

３は鉄釘で，両端が欠失している。図示右側が頭部で，左側が尾部である。断面形は菱形に近い。現長



第24図　ＳＡ－01遺物実測図



第25図　第１次調査地区トレンチ遺物実測図

11.1cm，重量11.8gを測る。

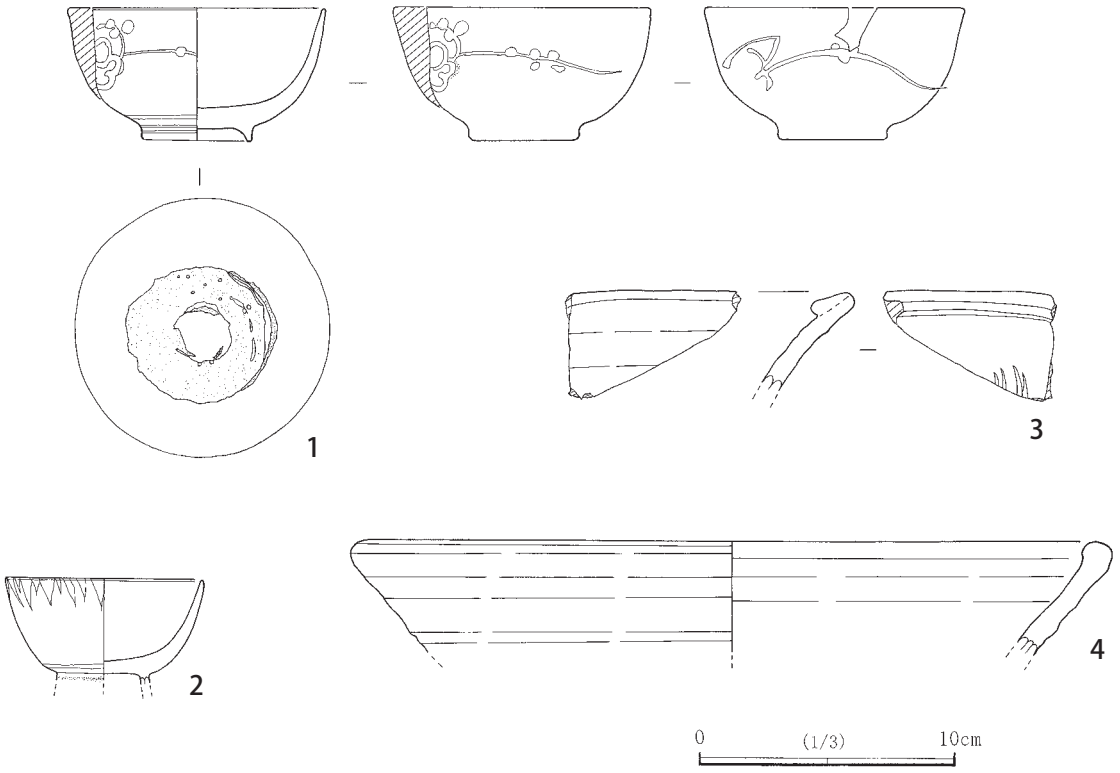
４は煙管（きせる）の吸い口である。真鍮製で，薄く鍛造した地金を丸めて継ぎ合わせて成形した後に，銅メッキを施している。現状ではほぼ銅に覆われているが，擦傷部からは地金の真鍮がのぞいている。羅宇との接合部には，羅宇と思われる木質の樹皮部分が遺存している。現長9.5cm，重量12.4gを測る。

５は砥石である。図示した下端部は欠損している。現長6.6cm，最大厚1.2cm，重量22.3gを測る。

第２次調査地区（第26図）

１は肥前磁器の染付碗で，口縁～体部の1/5が欠損している。胎土は青白く，透明釉がかかっている。高台は直立し，口縁はあまり開かない器形となる。文様は紺の濃淡が使い分けられている。高台部に二重，体部下位に一重の同心円文（蛇の目文）が描かれ，体部中程には梅の枝と，それにとりつく梅花とつぼみが軽やかに絵付けされている。なお，内面底部は，釉がリング状に焼け剥がれている。窯内での重ね焼きの痕跡かと思われる。口径10.1cm，高さ5.2cm，高台径4.3cmを測る。18世紀の製品である。

２は肥前磁器の小型碗である。体部以上は完形だが，高台の大半が欠損している。胎土は青白く，釉は両面にかかり透明である。淡い紺一色で絵付けされている。体部下位に一重の同心円が描かれ，口縁には笹の葉を思わせる一筆模様が，大小交互に繰り返される。口径7.8cm，現高4.1cmを測る。18世紀の製品



第26図　第２次調査地区トレンチ遺物実測図

である。

３は瀬戸・美濃産の擂鉢の口縁部破片である。胎土は橙褐色で両面に錆釉がかかっている。口縁端は内面に折り返され，指で強くオサエ調整されている。外面は強い横ナデ痕が残り，内面下端には擂鉢特有のカキ目ケズリが施されている。17世紀初頭の製品である。

４は瀬戸・美濃産の擂鉢の口縁部破片である。胎土は黄色がかった白色で両面に錆釉がかかるが，ムラが多く，滴状に凝着した部分や，釉がかからない部分が見られる。口縁端は内側に短く折り曲げられ，その端部は丸みを帯びている。内外面とも横ナデ痕が強く残されている。17世紀の製品である。

第４次調査地区（第27・28図）

１は瀬戸・美濃産の小型碗で，口縁から体部にかけて1/3程の破片である。器壁は薄く，あまり開かない器形になる。内外面とも鉄釉がかけられ，斑状に暗茶色～黒色を呈する。体部下位には白い細線で草花模様が描かれている。復元口径6.0cm，現高3.3cmを測る。17世紀後半の所産であろう。

２は肥前磁器の坏で，口縁から体部にかけて1/3程の破片である。口縁端はゆるやかに外反し，体部下端は，高台への移行部位がかろうじて残っている。胎土は白色で，透明釉がかかり，無文である。復元口径6.6cm，現高2.5cmを測る。18世紀の製品である。

３は瀬戸・美濃産の丸碗で，口縁から体部にかけて1/4程の破片である。胎土は白灰色で，外面にはロクロ挽きの際の凹凸が残っている。内外面とも鉄釉（錆釉）がかけられ，赤茶色の地肌に，青灰色の小斑点がびっしり浮き出している。体部上位には，釉がのらない部分が横雲のように延びて，黒色になっている。復元口径10.0cm，現高5.2cmを測る。17世紀後半の製品である。

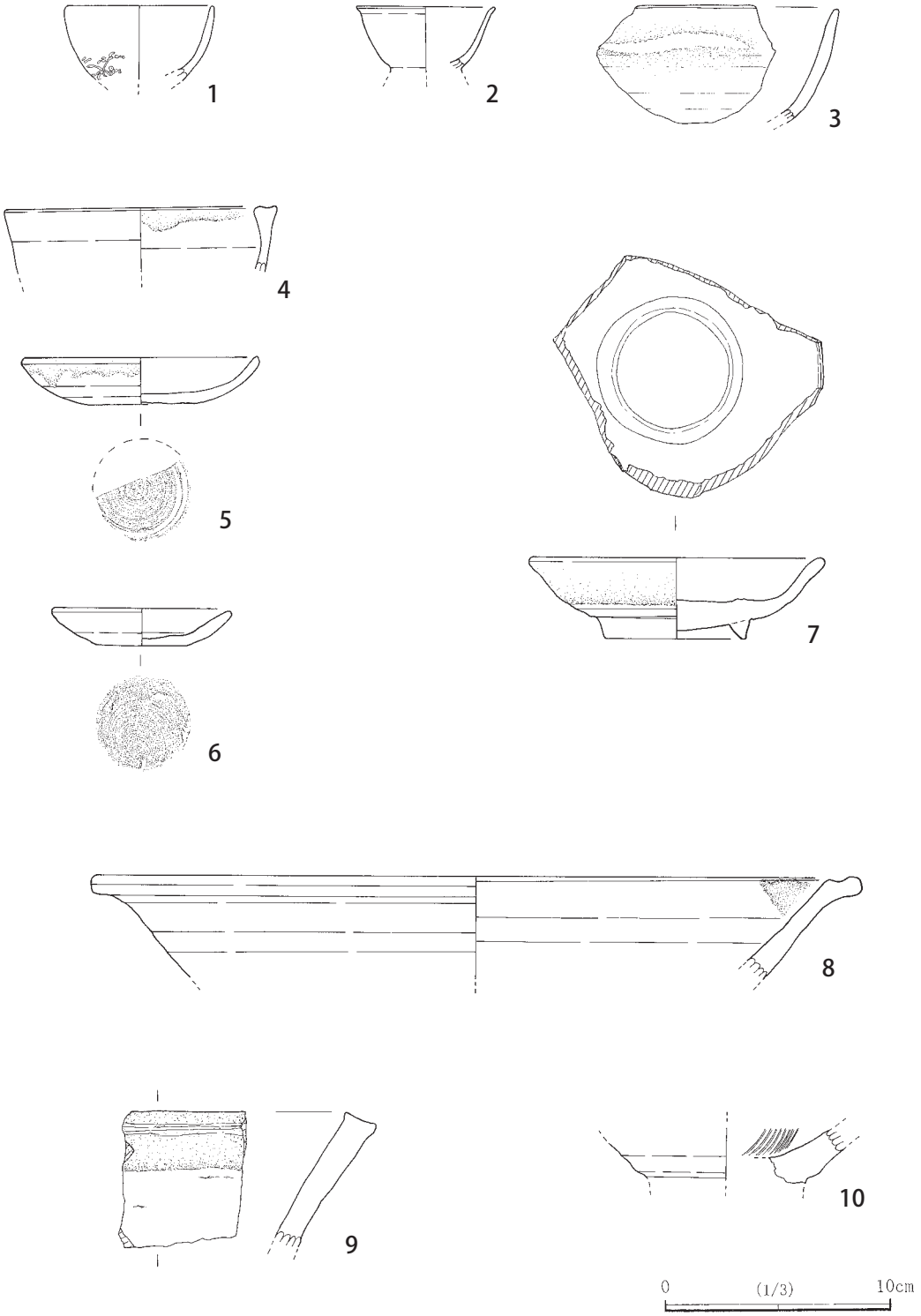
４は瀬戸・美濃の陶器香炉で，口縁部破片である。体部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁端に粘土紐が補強されて，蓋請けを形成している。胎土は黄白色で，外面と蓋請けには飴釉がかけられ，蓋請け直下の内面には，釉が滴状に凝着している。復元口径10.0cm，現高2.4cmである。18世紀の製品である。

５は志戸呂焼の皿で，1/4程の破片である。胎土は青灰色で緻密であり，断面には層状の縞目が観察される。底部外面には糸切り痕が残る。体部外面は回転ヘラケズリで調整されている。内面全体と外面口縁部付近には，茶褐色の厚い柿釉が施されている。なお，内面見込みにはリング状の重ね焼きの痕跡が見られる。復元口径10.4cm，現高2.0cm。18世紀の製品である。

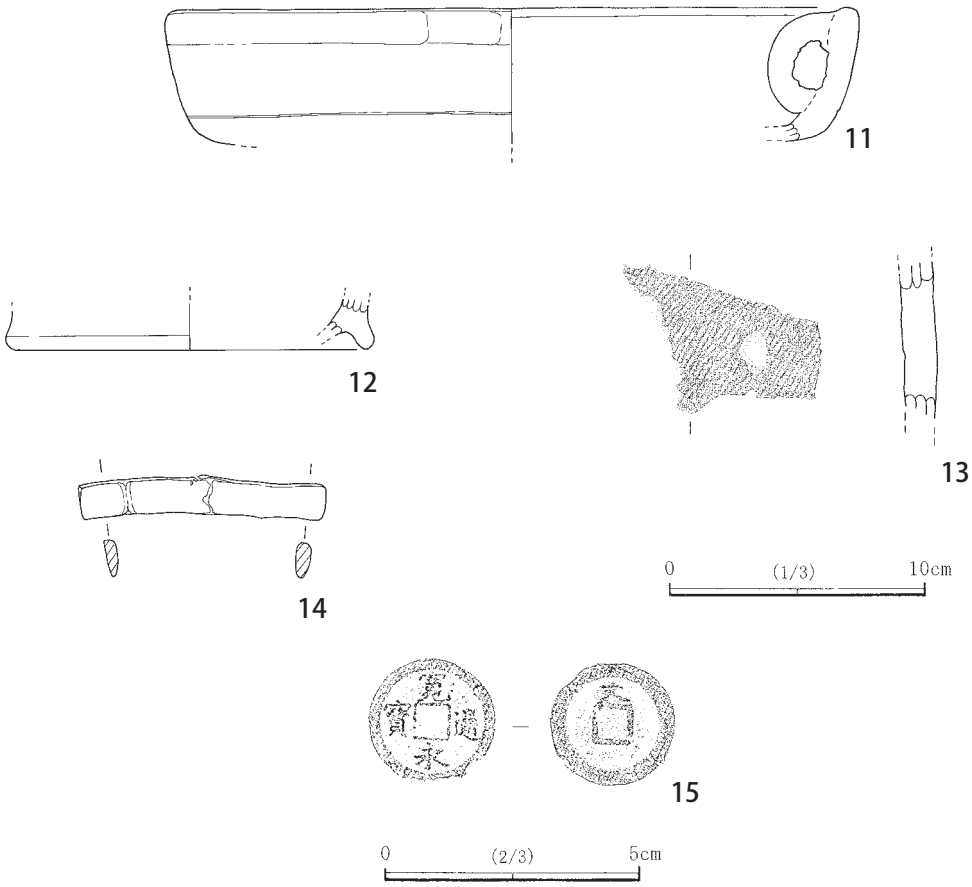
６は在地産のカワラケで，約1/2の破片である。橙褐色を呈し，胎土は精緻である。底部外面に糸切り痕を残し，内外面は横ナデ調整されている。復元口径7.9cm，高さ1.7cmを測る。近世の製品である。

７は瀬戸・美濃の輪禿皿の破片で，口縁の一部と底部全体が残存している。胎土は黄白色を呈する。底部外面は回転ヘラケズリされた後に，直立する輪高台が付けられ，口縁がゆるやかに開く器形である。内面は横ナデ，外面は底部周辺が回転ヘラケズリ，口縁～体部にかけて横ナデ調整されている。内面全体と外面体部上位に灰釉がかけられ，内外面とも細かな貫入が入っている。なお，内面底部には，重ね焼きの際のリング状痕跡が残っている。復元口径13.0cm，高さ3.6cmを測る。17世紀後半の所産であろう。

８は瀬戸・美濃産の大鉢で，口縁部1/4程の破片である。胎土は黄灰色を呈し，緻密である。分厚い体部から口縁にかけて器壁が薄くなり，口縁端は稜を作って横に開く器形で，端部が丸みを帯びるのが特徴である。内外面とも横ナデ調整で仕上げられている。両面ともクリーム色の灰釉がかかるが，口縁内面の一部には，銅緑釉の流し掛けが見られる。見込みには菊花文を有するものと思われる。復元口径34.0cm，



第27図　第４次調査地区トレンチ遺物実測図



第28図　第４次調査地区トレンチ遺物実測図（２）

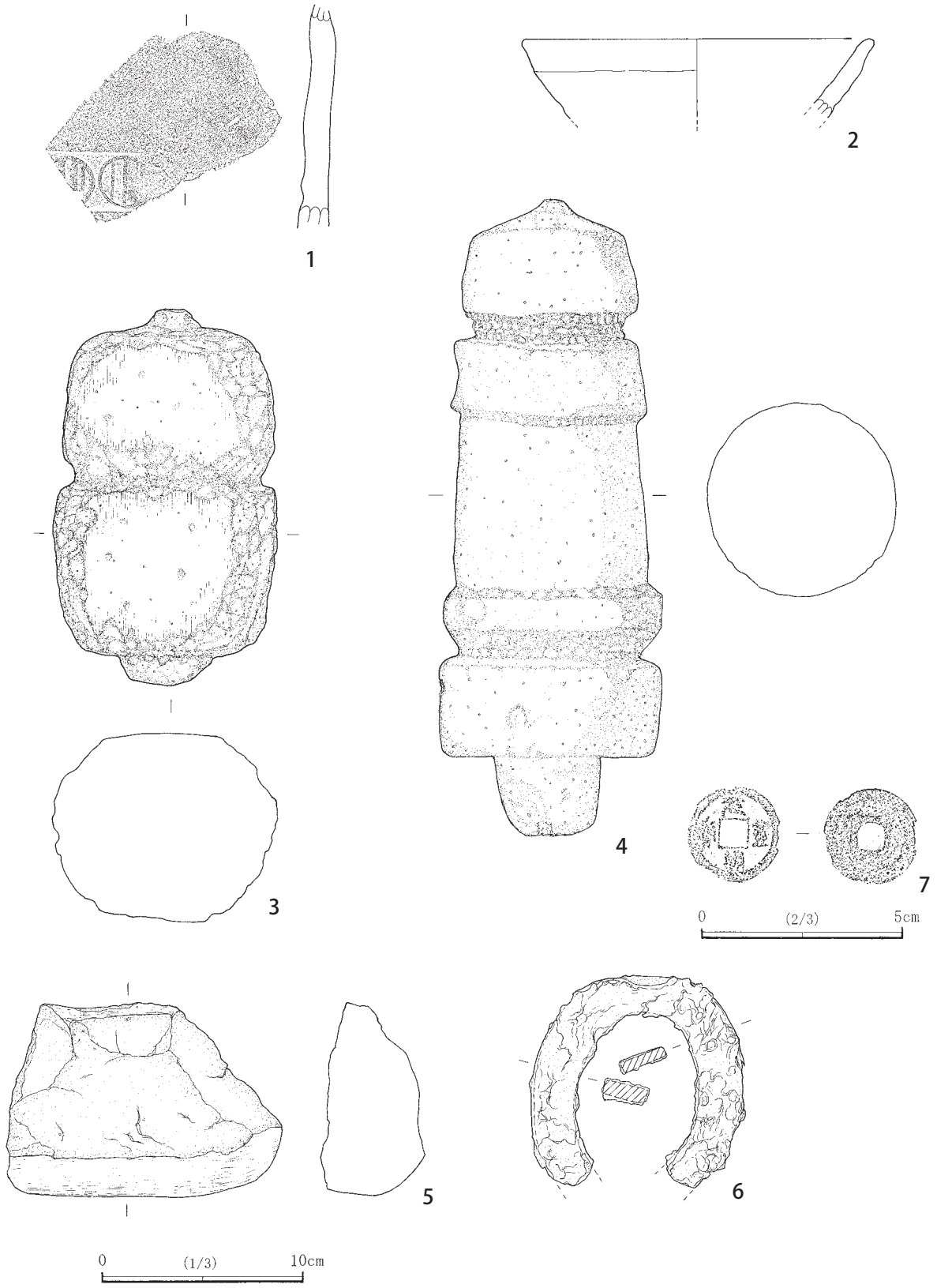
現高4.7cmを測る。17世紀後半の製品である。

９は常滑焼の片口鉢の口縁部破片である。胎土は茶褐色で，砂粒が含まれる。残存部位では，体部よりも口縁の方が分厚くなっている。口縁端は指で押圧され平坦面を形成し，内外面両側に，余った粘土がバリ状にはみ出している。窯内の位置関係によるものか，口縁平坦面と外面口縁直下が変色し，つやのある暗色を帯びている。現高6.0cmを測る。15世紀後半の製品である。

10は瀬戸・美濃産の擂鉢の体部下端の小破片である。胎土は黄白色を呈し，緻密である。内外面とも暗褐色の錆釉がかかっている。内面にはカキ目ケズリが認められる。17世紀の製品であろう。

11は素焼製の内耳鍋の体部破片である。下端部が屈曲して，浅い扁平な器形となる。内耳は体部内面に粘土紐を貼り付け，接着部分を粘土を継ぎ足して補強している。胎土には砂を含んでいる。断面観察によれば，底部となる円盤に，体部となる粘土帯を接合して器形を成形しており，その接合痕が体部外面に現れている。口縁付近は横ナデ調整されている。外面は煤で覆われている。現高4.6cmを測る。

12は須恵器長頸壷の台部破片である。下膨れした壷の底部に，粘土紐を巡らせて台部を成形して，横ナデ調整されている。明灰色を呈し，裏面には緑色の自然釉が付着している。



第29図　第６次調査地区トレンチ遺物実測図

13は須恵器大甕の胴部破片である。暗青灰色を呈し，外面はタタキ目，内面には横ナデが施されている。

14は刀子状鉄器である。両端が切断されている。現状は長方形で，長軸に直行する１条の突帯を有する。断面は刃物特有の形態をとるが，刃にあたる部分が研ぎ出されておらず，丸みを帯びている。長さ9.7cm，幅1.4cm，重量22.0gを測る。

15は寛永通宝の銅銭である。鋳上がりは良好で，裏面には「文」字が鋳出されている。直径2.5cm，重量2.17gを測る。

第６次調査地区（第29図）

１は常滑焼の大甕胴上位破片である。胎土は表面は暗茶褐色，内面は黒色で，白色小石が混じる。三つ引々両文を２連（以上？）陰刻した長方形の板を施文具として，器表面に押印している。

２は土師器甕または壷の口縁部破片である。胎土は赤褐色で，砂を含む。胴部はこの下端に接続し，銅張りになる器形のようである。外面は口縁端付近で緩く屈曲して開いている。

３は五輪塔の一部である。空輪（宝珠）と風輪（請花）が一連になっており，風輪の下にほぞが付いて，火輪（笠）と結合するようになっている。材質は緑がかった玄武岩で，白色斑晶が含まれている。断面形は不整楕円形を呈し，正・裏面はやや平滑に仕上げているが，両側面は荒削りで，ノミ跡がはっきり残されている。現長18.7cm，最大幅9.5cm，重量2,330gを測る。

４は宝篋印塔の相輪部である。上から宝珠・請花・九輪・請花・伏鉢と続いて，下端には露盤へ接合するほぞが付けられている。材質は赤みがかった玄武岩である。どの部位も断面形は円形で，九輪の表現は省略され，請花や伏鉢も簡略表現されている。細かなノミ跡を残すものの，丁寧に成形されている。現長32.1cm，最大径は伏鉢部で11.0cm，重量3,580gを測る。

５は五輪塔の火輪（笠）の破片である。材質は緑がかった玄武岩で，風化部分は白っぽく見える。屋根の部分は荒く削り放しだが，軒（下面）の部分は，滑らかに成形されて丸みを帯びている。現高8.2cm，重量996gを測る。

６は鉄製の馬蹄である。錆が全体に行き渡り，目釘穴の所在は不明である。近・現代の製品である。長さ10.6cm，最大幅10.5cm，厚さ0.8cm，重量210gを測る。

７は古銭貨で，銅製の鐚（びた）銭である。方孔の周囲に四文字配されているが，鋳つぶれて判読できない。直径2.4cm，重量1.96gを測る。

第6章　ま　と　め

今回の調査で明らかになった真名宿谷城との関係は，調査範囲北部の尾根において，切岸造成を伴う山上曲輪の先端が検出された。この尾根はさらに東に延びているが，人為的な造成痕跡は認められず，城本体はこの山上曲輪で終了していることが確認された。

また，南部の尾根からは１か所の腰曲輪と２か所の堀切が検出された。腰曲輪の南北では，これを切断する形で，堀切が配されていた。この曲輪の北部の尾根上には，山上曲輪が予想されていたが，今回の調査では確認されなかった。この曲輪を南部で断ち切る堀切の，調査範囲外の東方尾根上にも，曲輪類の遺構の存在が十分想定される。

そのほかの遺構について，２基のやぐらは類例も乏しく，遺物も少ないので年代判定が困難であるが，城跡よりも古く，城跡とは無関係な遺構と判断した。出土遺物中の石塔類は，これらの遺構からの流出品であるかもしれない。そのほかの遺構の時期判断は，寛永通宝等の銭貨によるものである。

出土遺物については，真名宿谷城の築城期とみられる15世紀後半にかかるものは少なく，むしろ近世の製品が多く目立った。このことは，今回の調査範囲が城の本体の周縁部にあたることが考えられる。さらには，本城の廃絶後に，周辺の堀ノ内や宿の集落住民が入り込んで，薪や菜・栗を採集する入会地的な土地利用がなされたとも想定されるのである。

写　真　図　版

図版1

遺跡周辺の航空写真

図版2

▲北から

▲西から

第１次調査地区調査前風景

▲北から

▲東から

第３次調査地区調査前風景

図版4

▲北東から

▲同近景

第４次調査地区調査前風景

第２次調査地区調査前風景（南から）

第５次調査地区調査前風景（南東から）

図版6

◀第１次調査地区北部低地

◀第１次調査地区北部低台地

◀第３次調査地区中央台地

トレンチ発掘状況（１）

第３次調査地区西部斜面▶

第４次調査地区西部斜面▶

第４次調査地区西部台地▶

トレンチ発掘状況（２）

図版8

◀第６次調査地区北部斜面

◀第６次調査地区中央斜面

◀同上セクション

トレンチ発掘状況（３）

第２次調査地区中腹台地▶

第２次調査地区南部斜面▶

同上セクション▶

トレンチ発掘状況（４）

▲第５次調査地区東部台地

▲第５次調査地区東部斜面

▲第５次調査地区南部低地

トレンチ発掘状況（５）

▲調査前風景（北から）

▲調査前風景（南から）

図版12

◀腰曲輪（南から）

◀同上（北から）

◀柱穴群

切岸の状況▶

同上（北部）▶

同上（南部）▶

図版14

◀調査前

◀柱穴群

◀土層セクション

調査前▶

▲西から

溝内ピット▼

▲東から

土層セクション▼

◀調査前

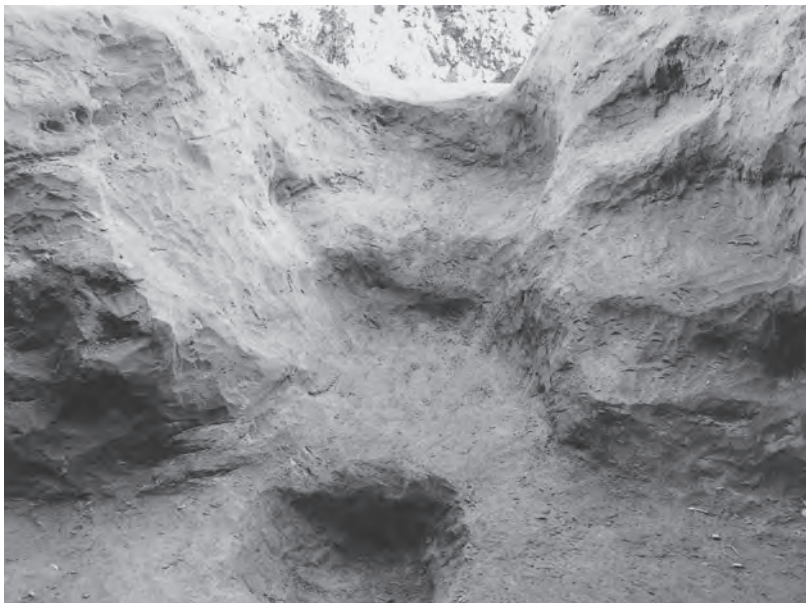
◀北から

◀屈曲部

全景▶

近景▶

内部から入り口を望む▶



ＳＴ－01

◀ＳＴ－02（上方から）

◀同上（下方から）

◀ＳＫ－01

ＳＴ－02・ＳＫ－01

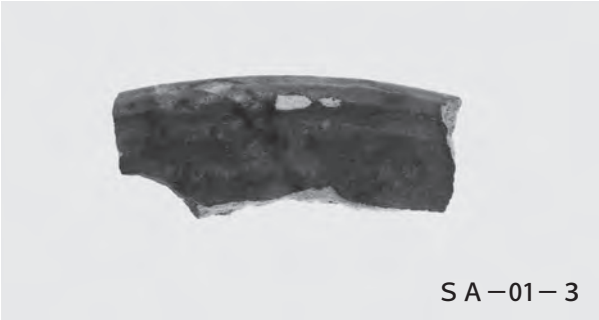
▲南から

東から▼

ＳＤ－01－１

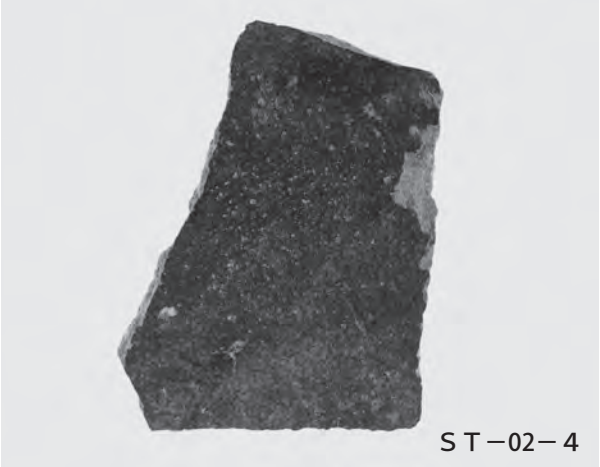
ＳＡ－01－２

ＳＡ－01－１


ＳＡ－01－３

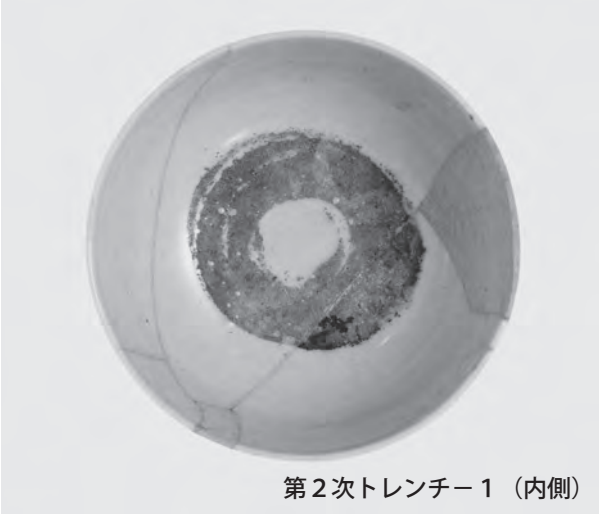
ＳＴ－02－１

第１次トレンチ－１


ＳＴ－02－４

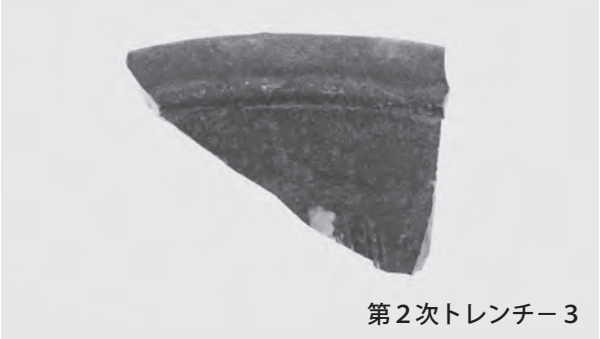
第２次トレンチ－１

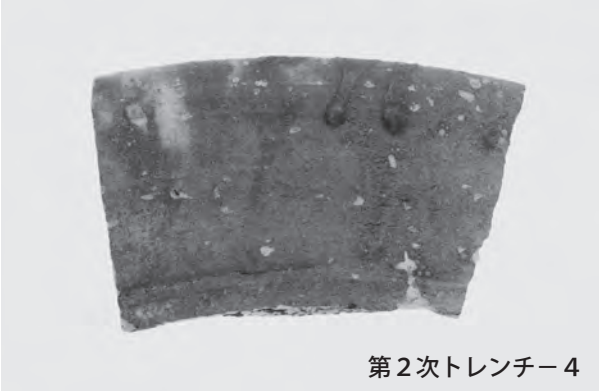
陶磁器等（１）

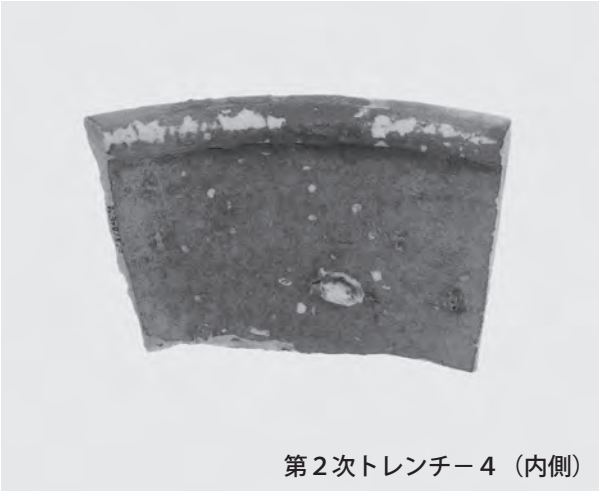

第２次トレンチー１（内側）

第２次トレンチー２

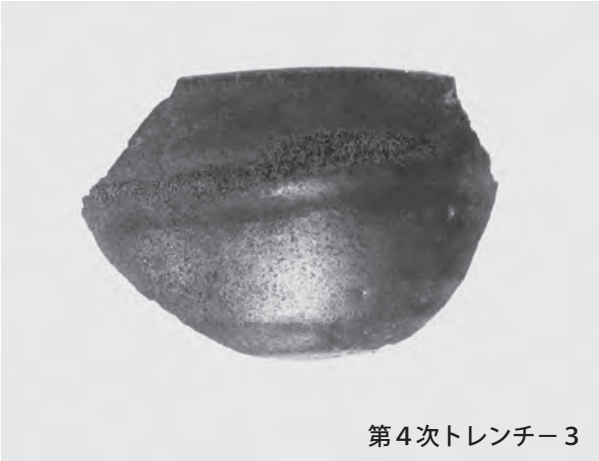
第１次トレンチー２


第２次トレンチー３


第２次トレンチー４


第２次トレンチー４（内側）

第４次トレンチー１


第４次トレンチー３

陶磁器等（２）

第４次トレンチ－２

第４次トレンチ－６

第４次トレンチ－４

第４次トレンチ－７

第４次トレンチ－５

第４次トレンチ－９

第４次トレンチ－８（内面）

第４次トレンチ－10

陶磁器等（３）

第４次トレンチ－11

第６次トレンチ－１

第６次トレンチ－２

陶磁器等（４）

第６次トレンチ－４

ＳＸ－01－３

第６次トレンチ－３

石造品（１）

第６次トレンチ－５

ＳＴ－02－５

ＳＫ－01－１

第１次トレンチ－５

ＳＡ－01－５

石造品（２）

第１次トレンチ－３

第１次トレンチ－４

第４次トレンチ－14

第６次トレンチ－６

ＳＤ－01－２

ＳＫ－01－２

ＳＡ－01－６

第４次トレンチ－15

ＳＸ－01－４

第６次トレンチ－７

金属器

報　告　書　抄　録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	茂原市真名宿谷城跡
巻次	20
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第687集
編著者名	雨宮龍太郎
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦2012年８月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度（日本測地系） 北緯	経緯度（日本測地系） 東経	調査期間	調査面積	調査原因
真名宿谷城跡（まんなしゅくやつじょうせき）	千葉県茂原市真名字堀ノ内730－１番地ほか（ちばけんもばらしまんなあざほりうちばんちほか）	12021	015	35度27分36秒	140度15分25秒	20100301～20110131	16,822.74㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真名宿谷城跡	城跡	中世	腰曲輪，山上曲輪，堀切	中・近世陶磁器，石造品，銭貨	

要約	調査区は真名宿谷城の東側を占め，調査区北部では，山上尾根の先端部検出をもって，城跡の末端が確認され，南部では腰曲輪や堀切を検出し，さらに東方尾根上に遺構が展開する見通しを得た。

千葉県教育振興財団調査報告第687集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書20

―茂原市真名宿谷城跡―

平成24年８月31日発行

編　　集　　公益財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　東日本高速道路株式会社関東支社
東京都台東区北上野1-10-14

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社みつわ
千葉市美浜区新港213－５